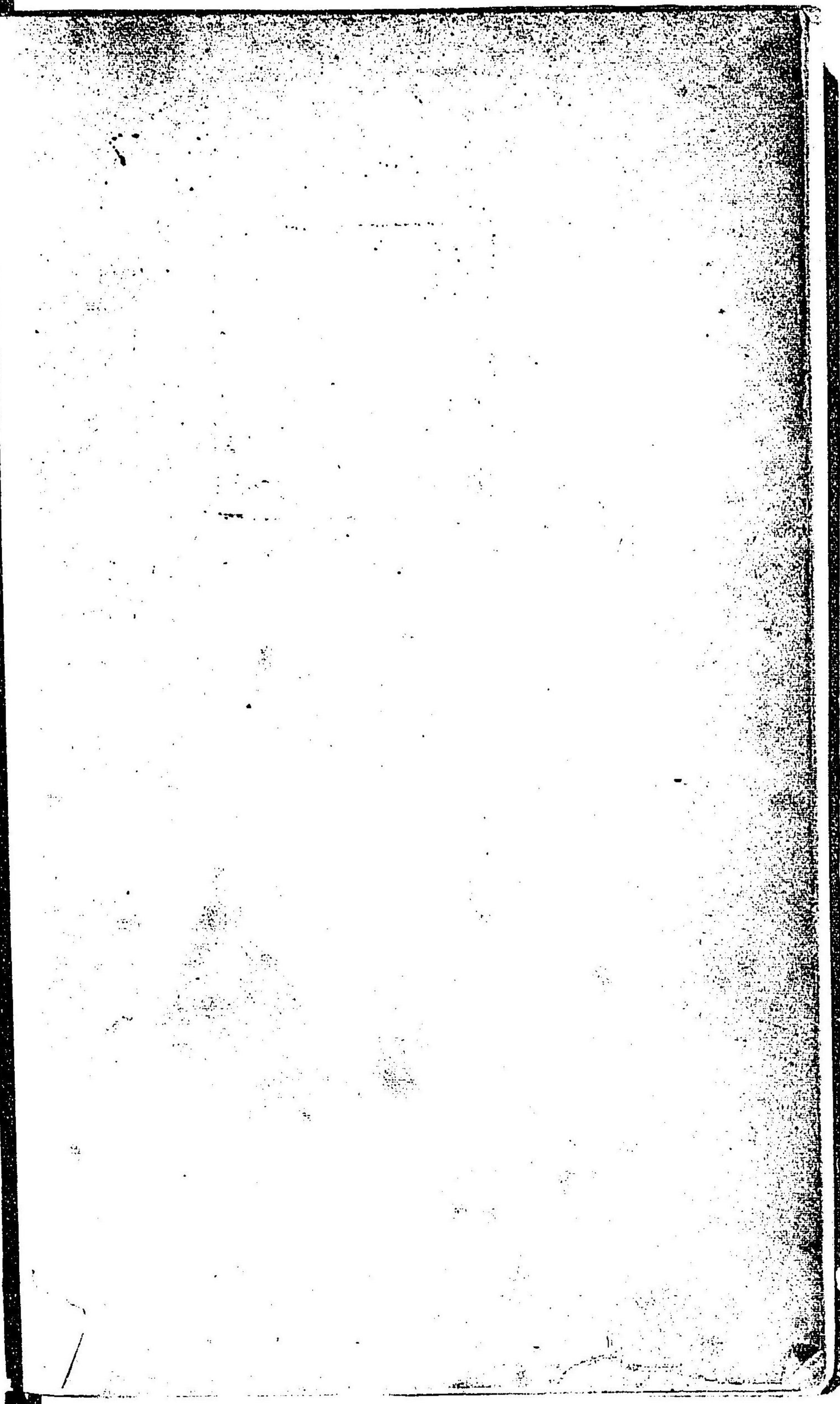
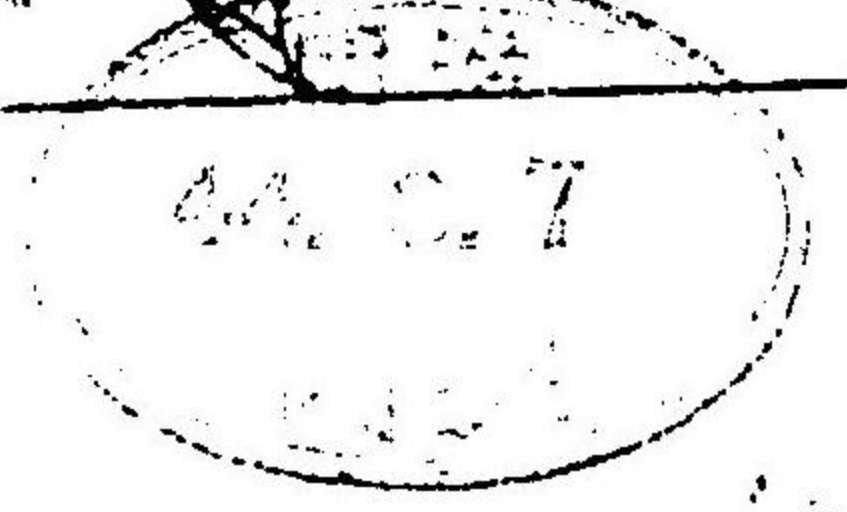
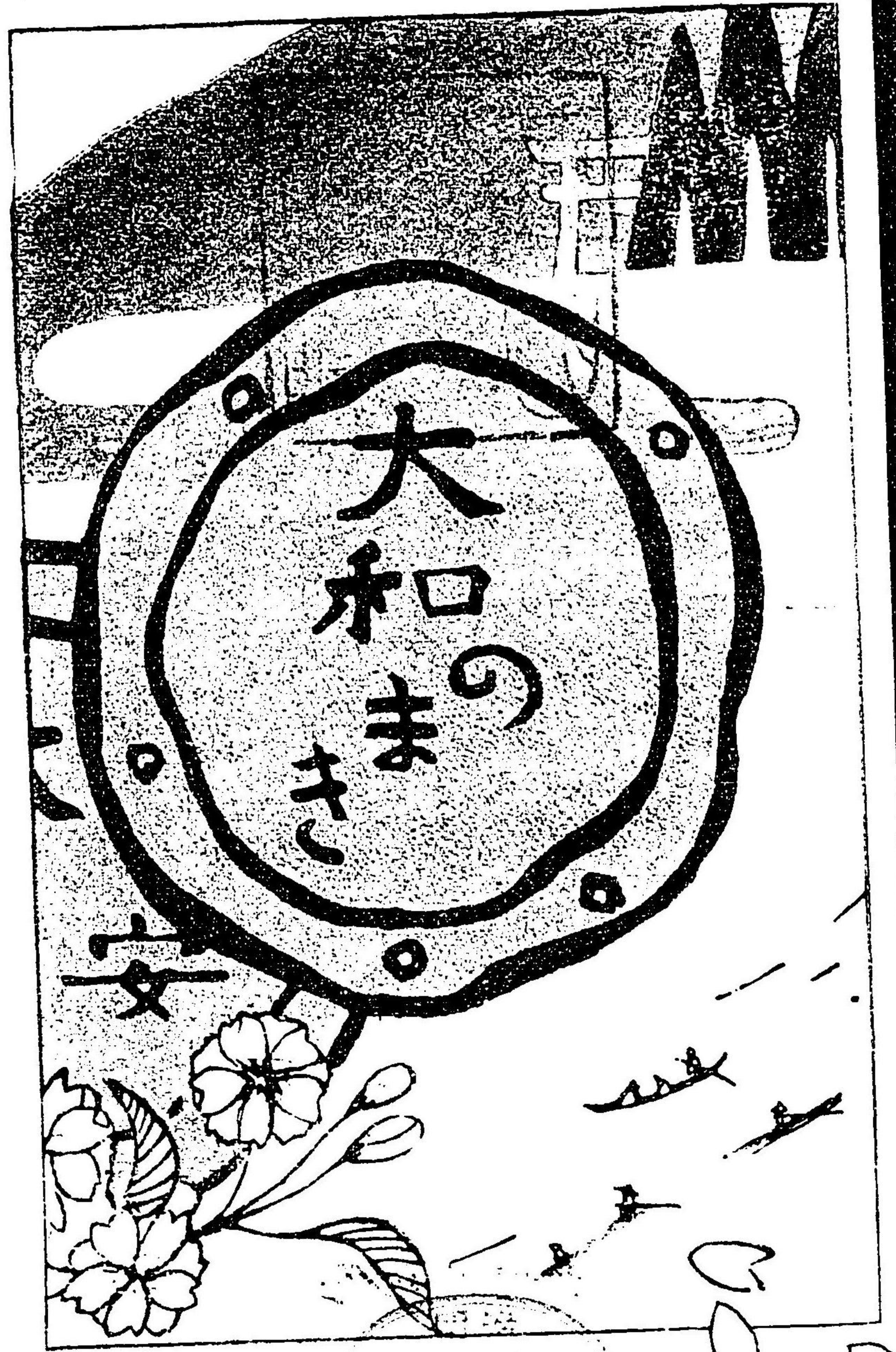








530-27







光弘澤中

池澤接





猿沢也畔  
音無了





光弘澤中

野口春





野

日

春



光弘澤中

野日作







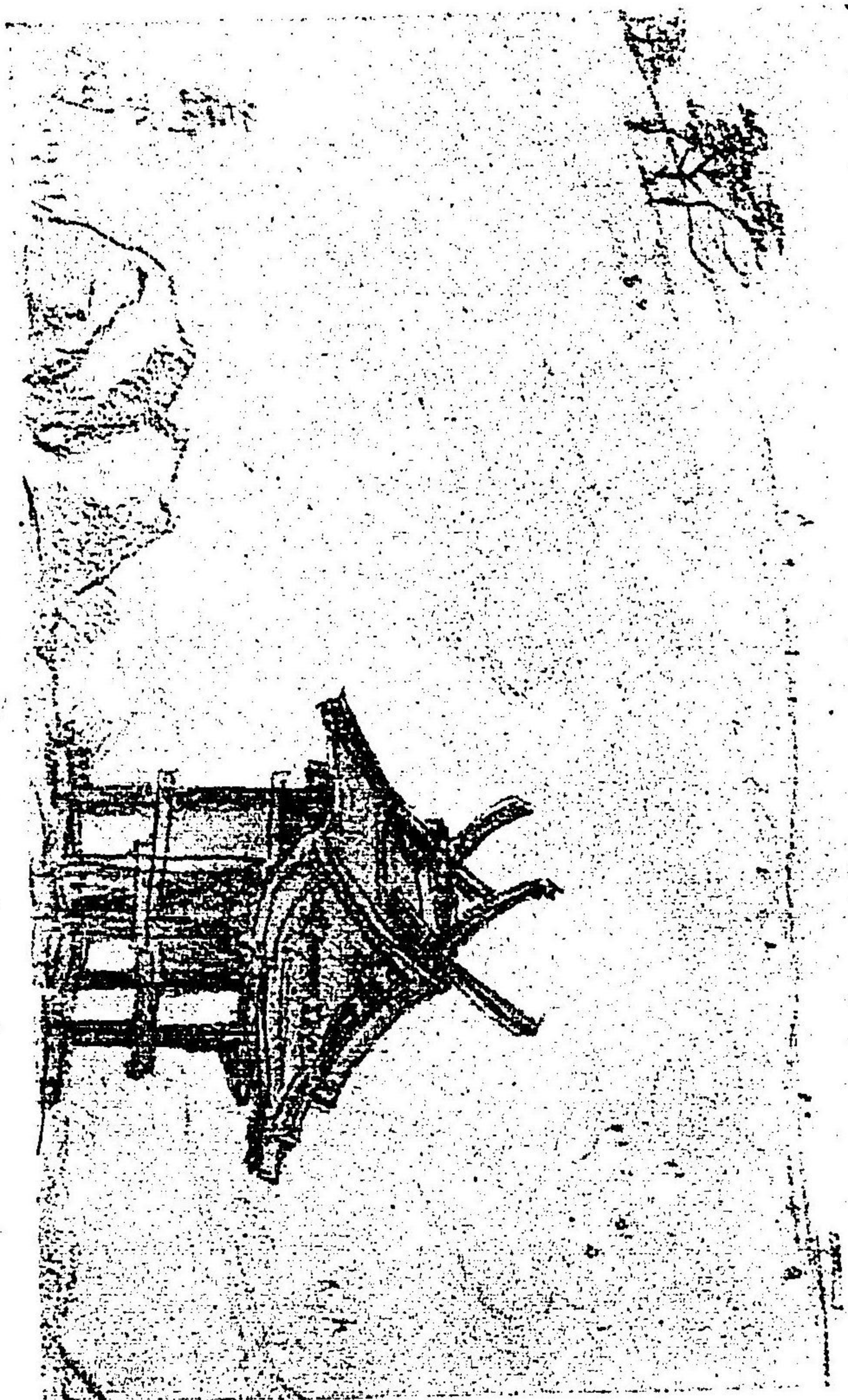
大佛七王門





大 狗 寺 大 東





山 艸 若





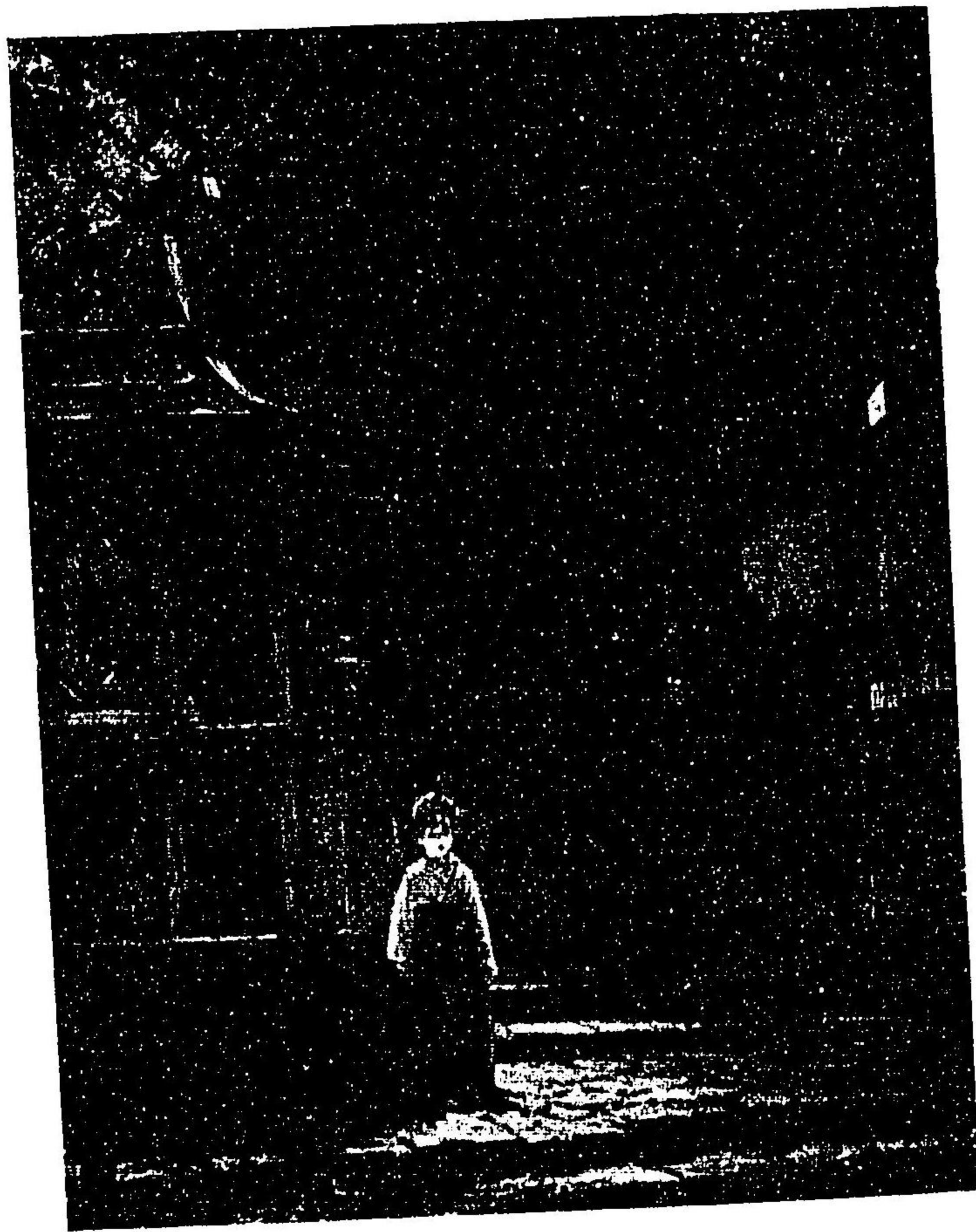
庫寶山向手





春 日 境 內

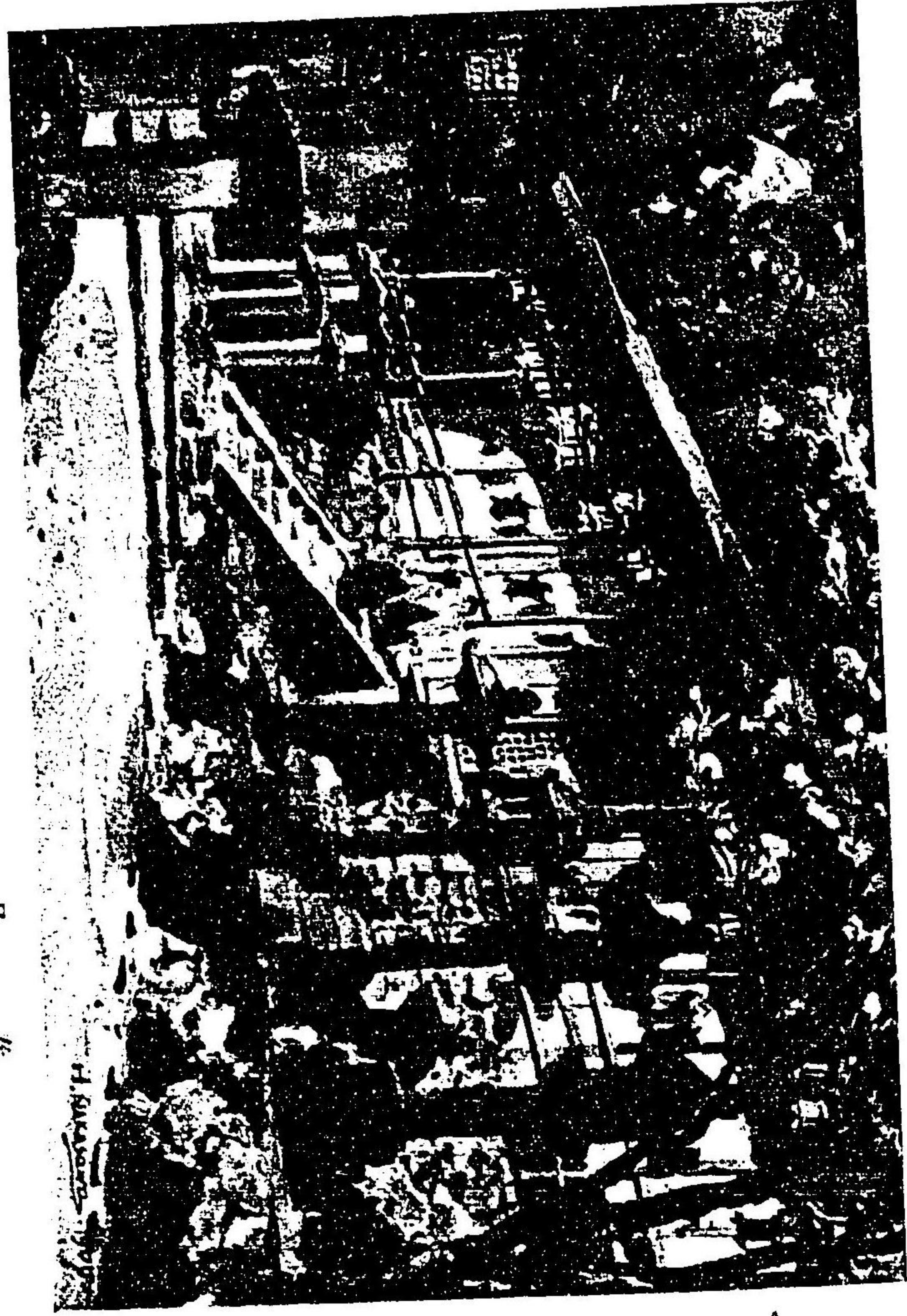




光 弘 澤 中                      日      春



平 野 中



日 寺



光弘深中



社の町家





興禪經卷之三內  
須菩提尊者  
奈波博多館所見

提 菩 須



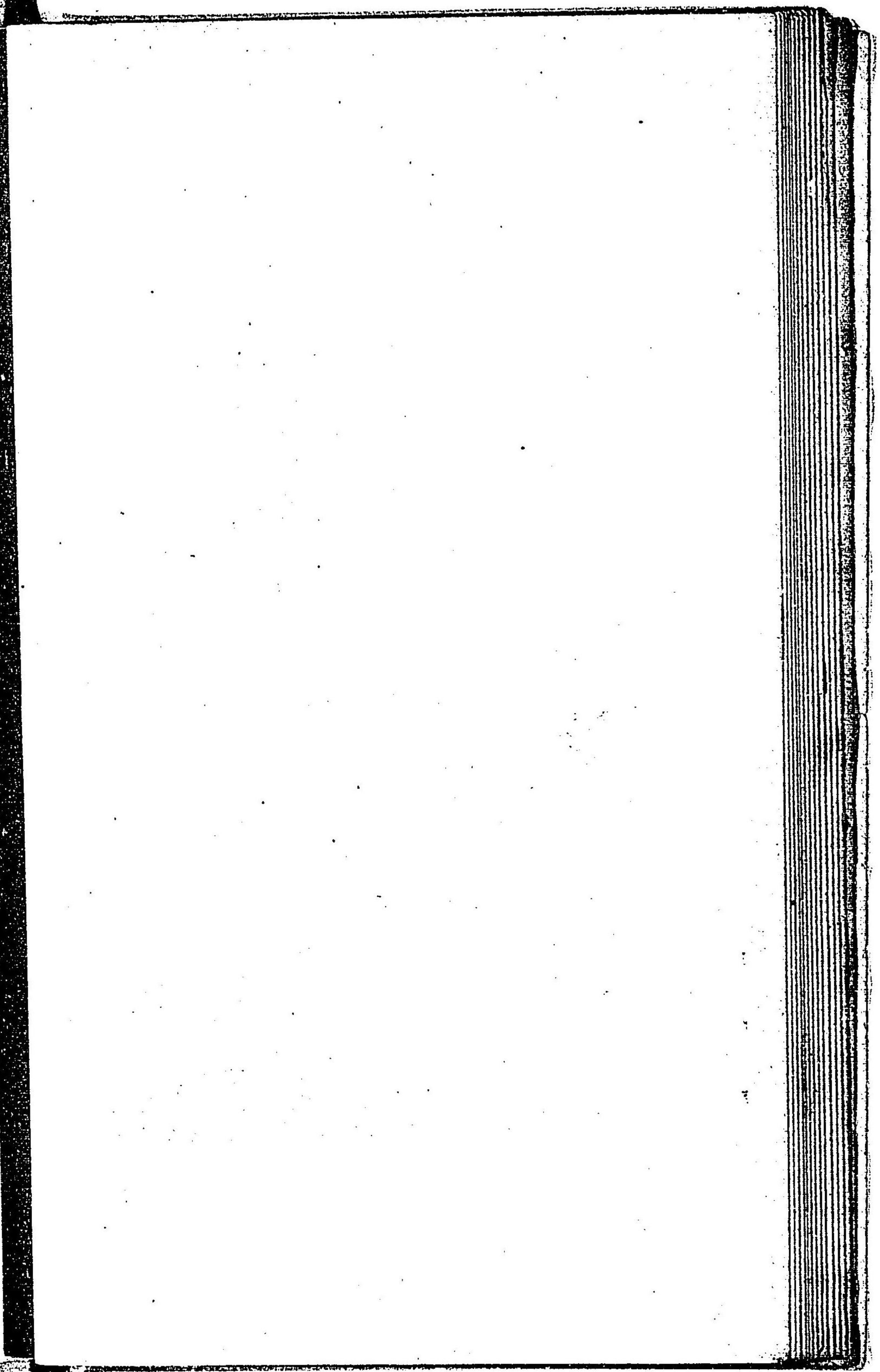


高内山

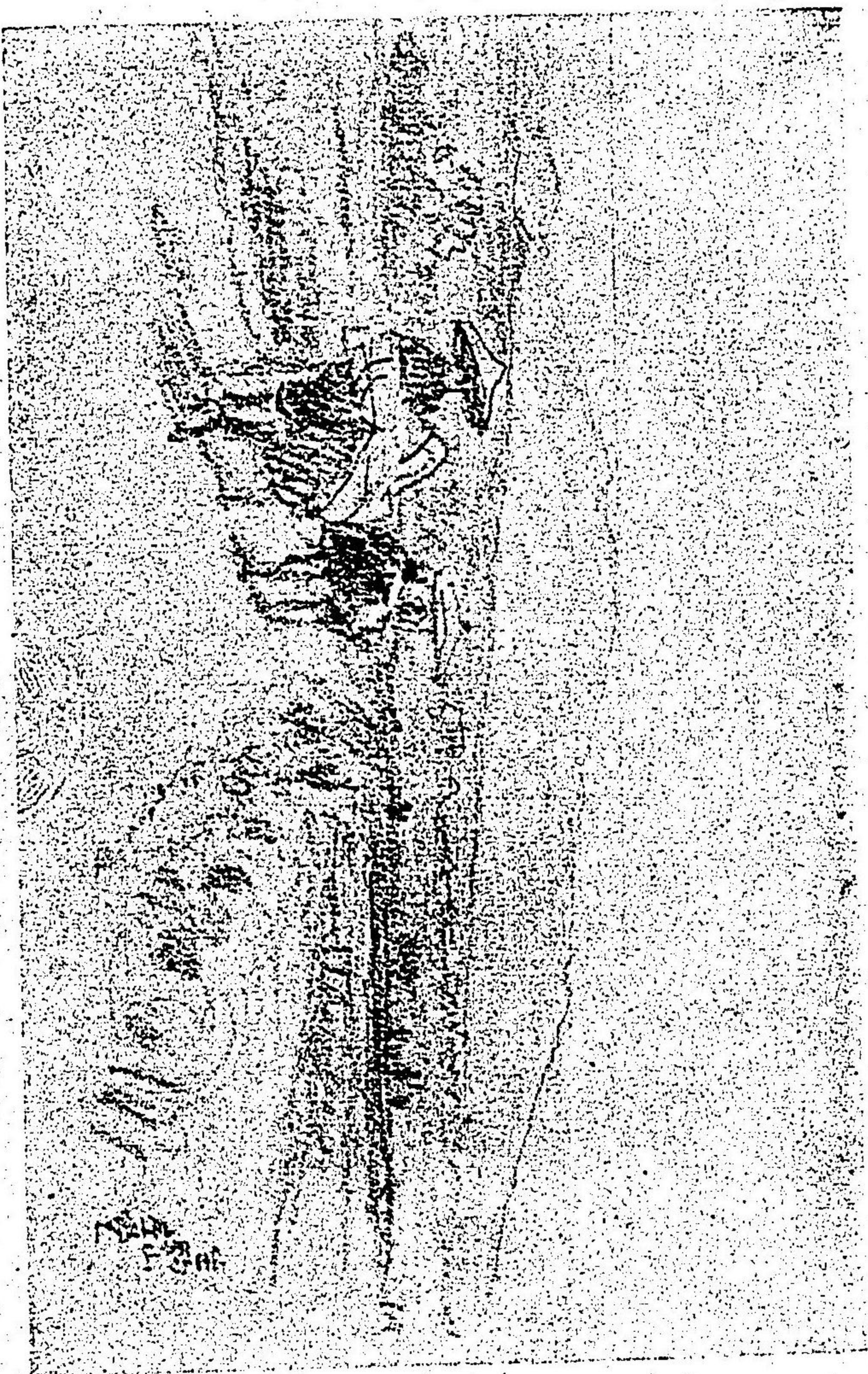




白 雲 寺







生駒街邊





海龍王寺境內





橫 笛 堂



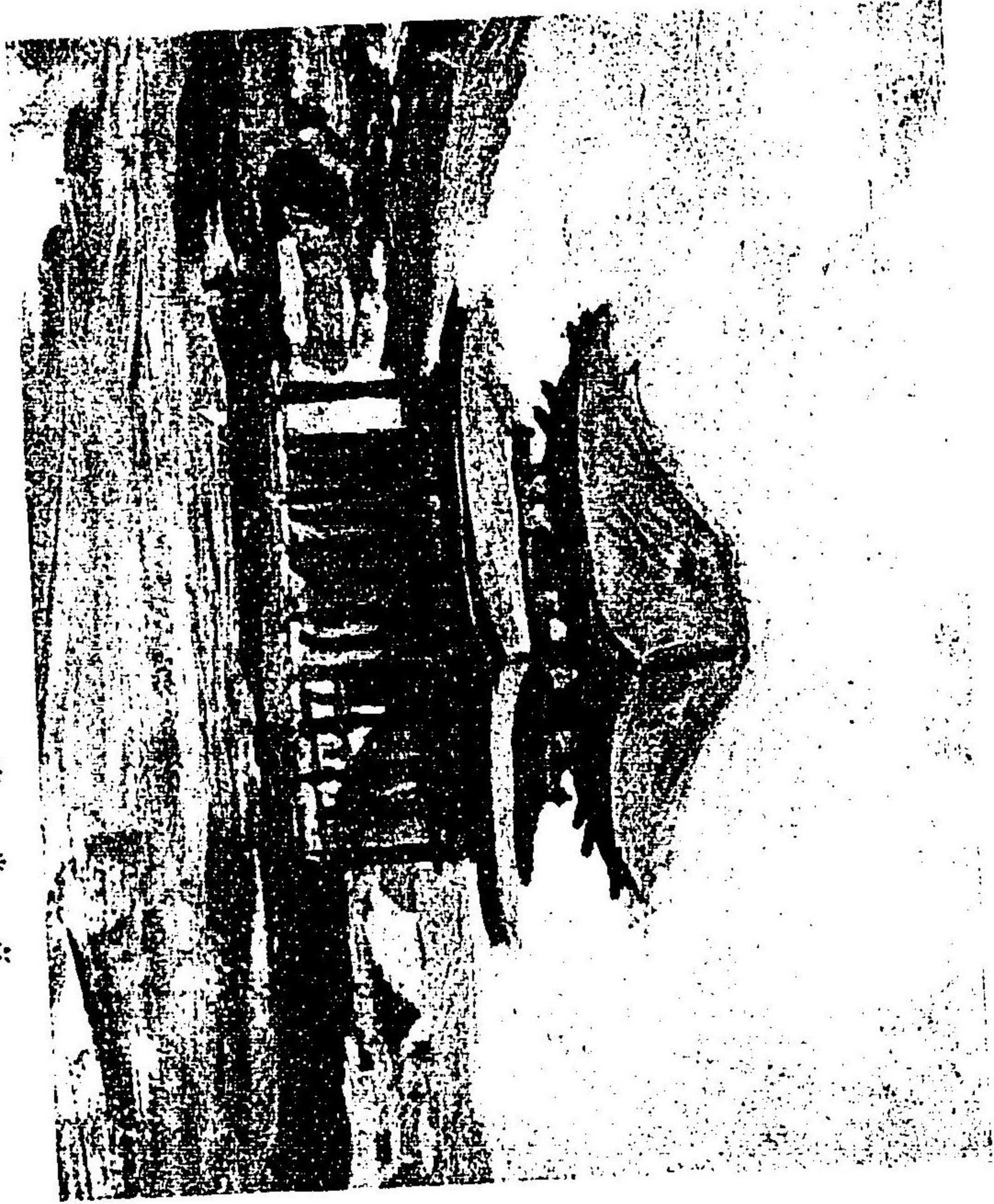


法華寺

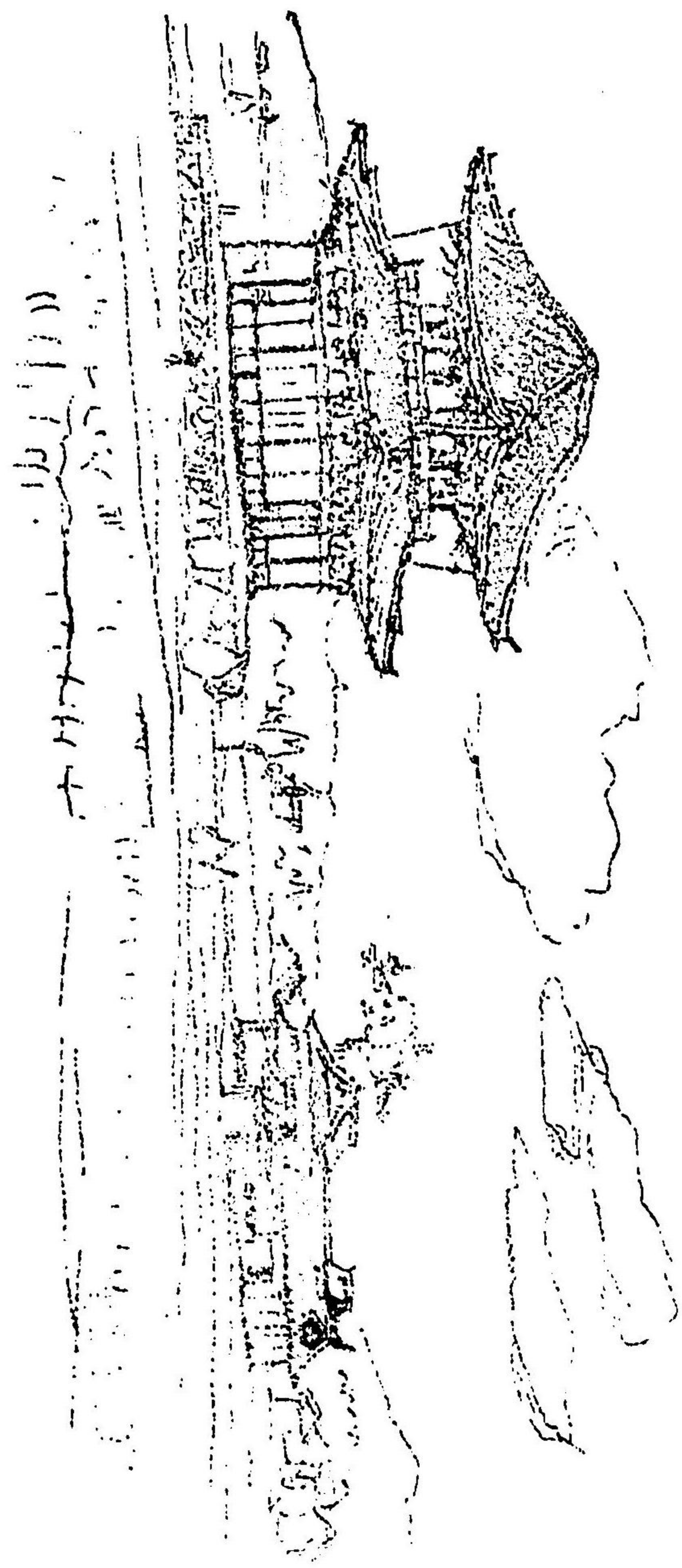


光弘澤中

寺光空







18





西大寺  
春日遠望

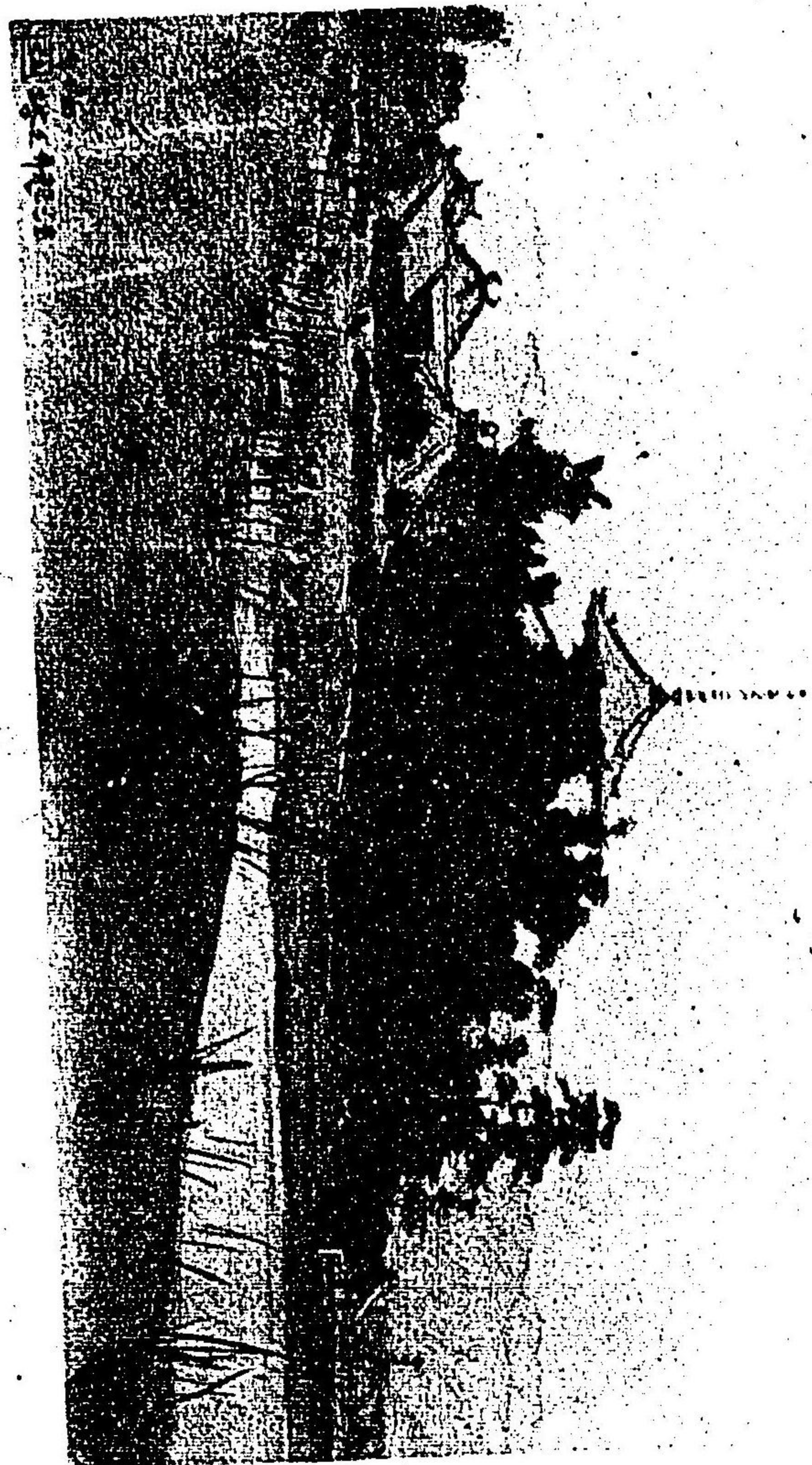


中澤弘光



廣田隆子

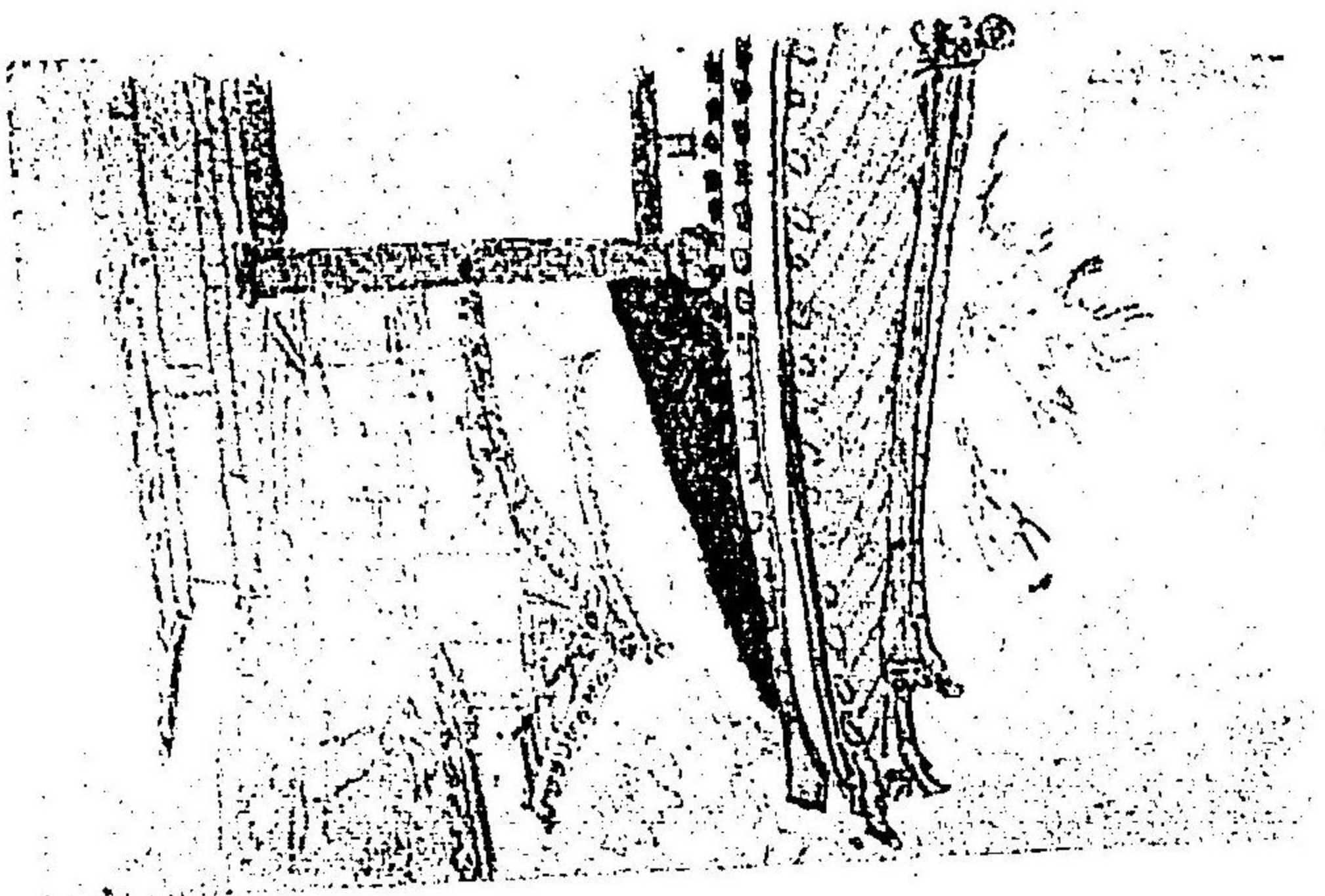




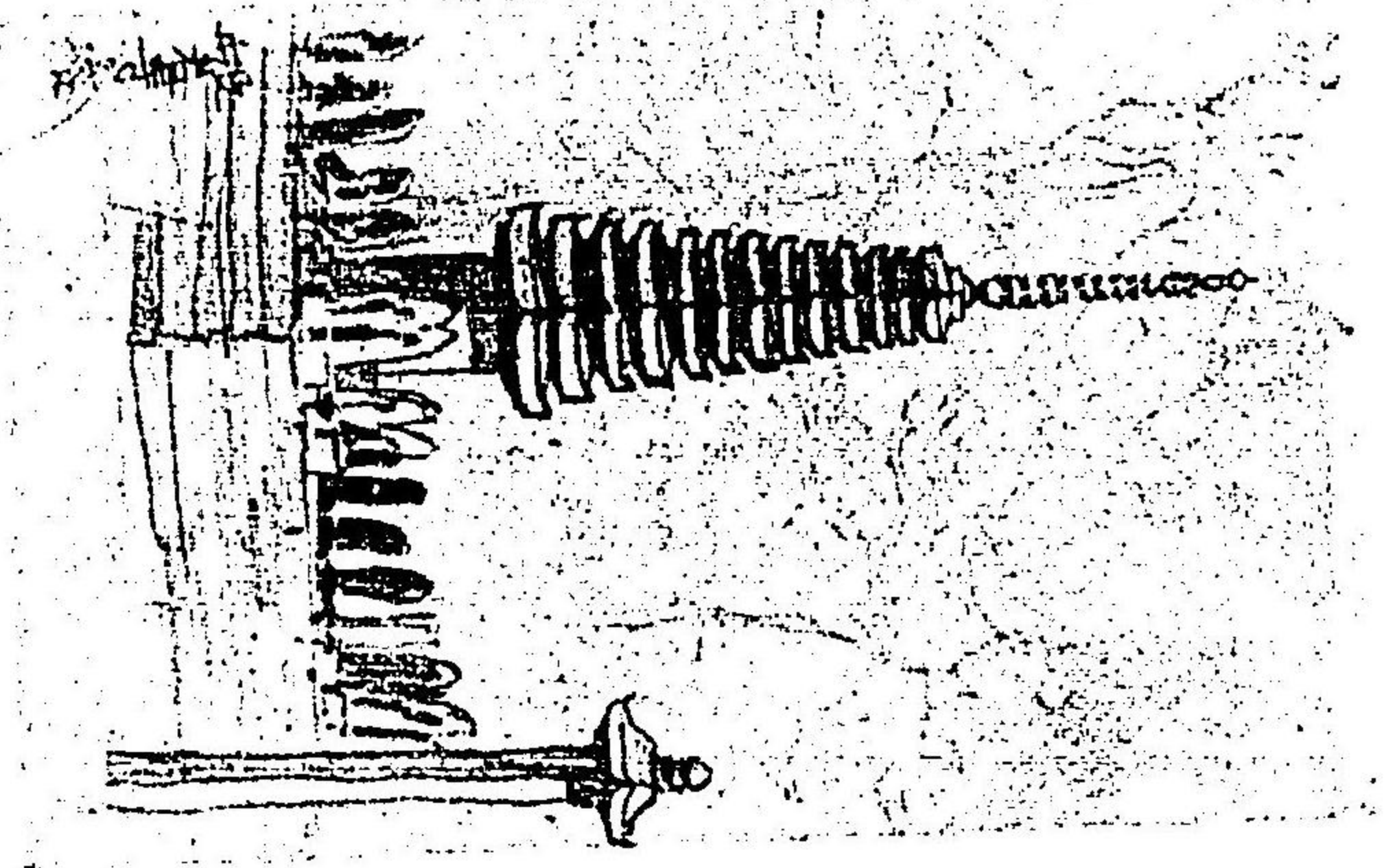
法 巴 崇



新築師寺



般若寺の塔







光弘澤中

殿夢寺隆法









光弘澤中

寺麻當

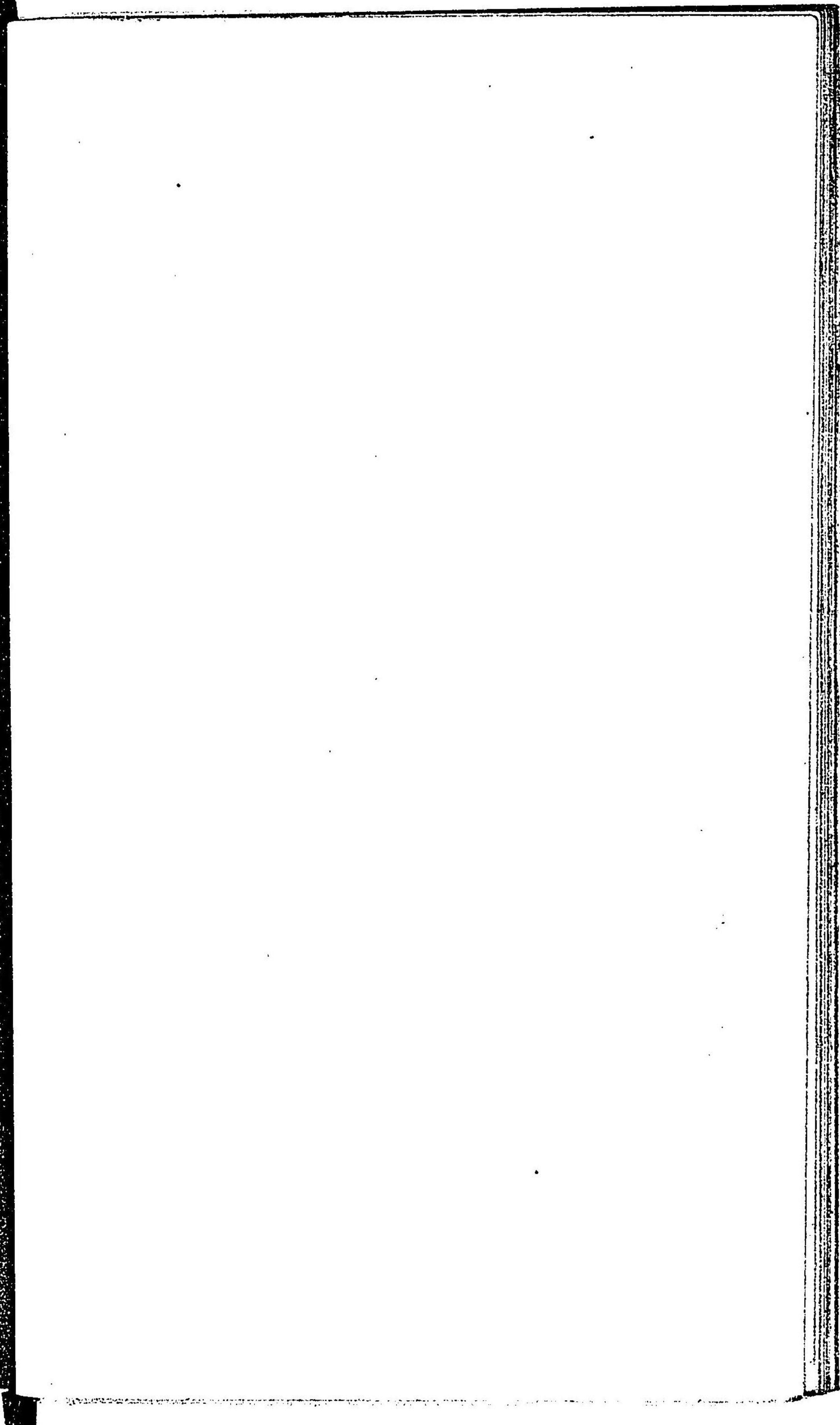
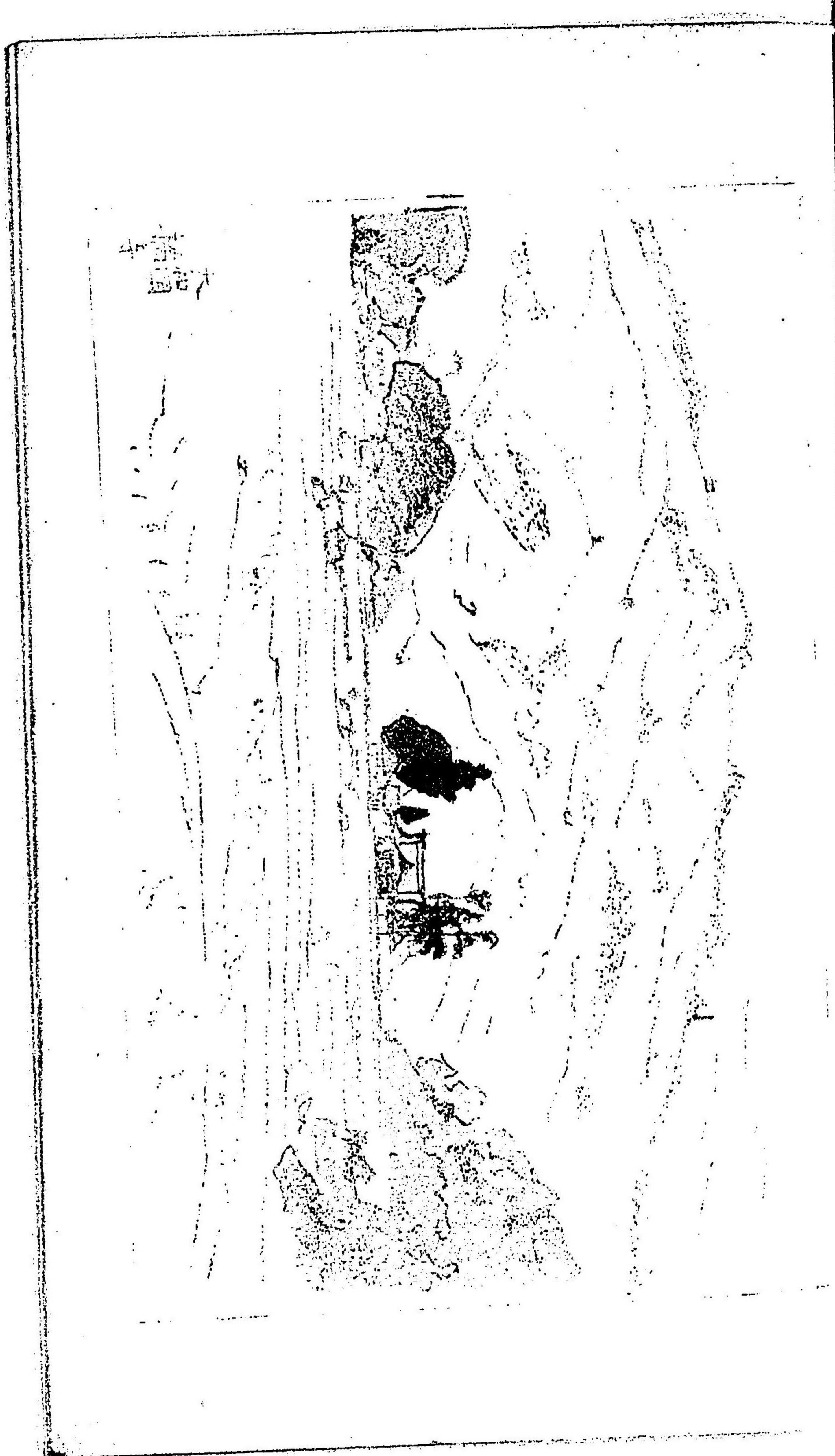




中山澤弘光

中山澤弘光 靈阪寺









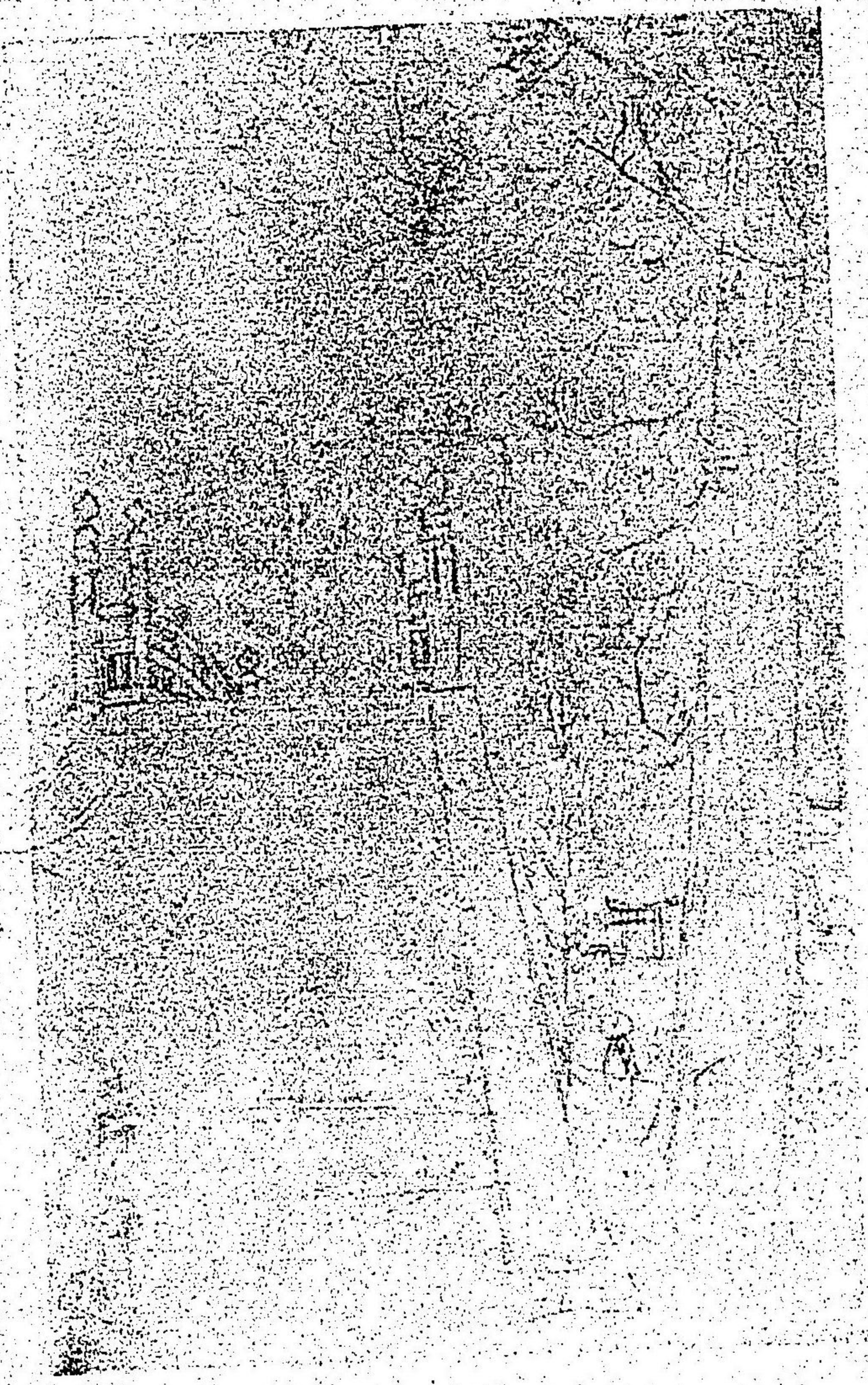
大和岡  
寺



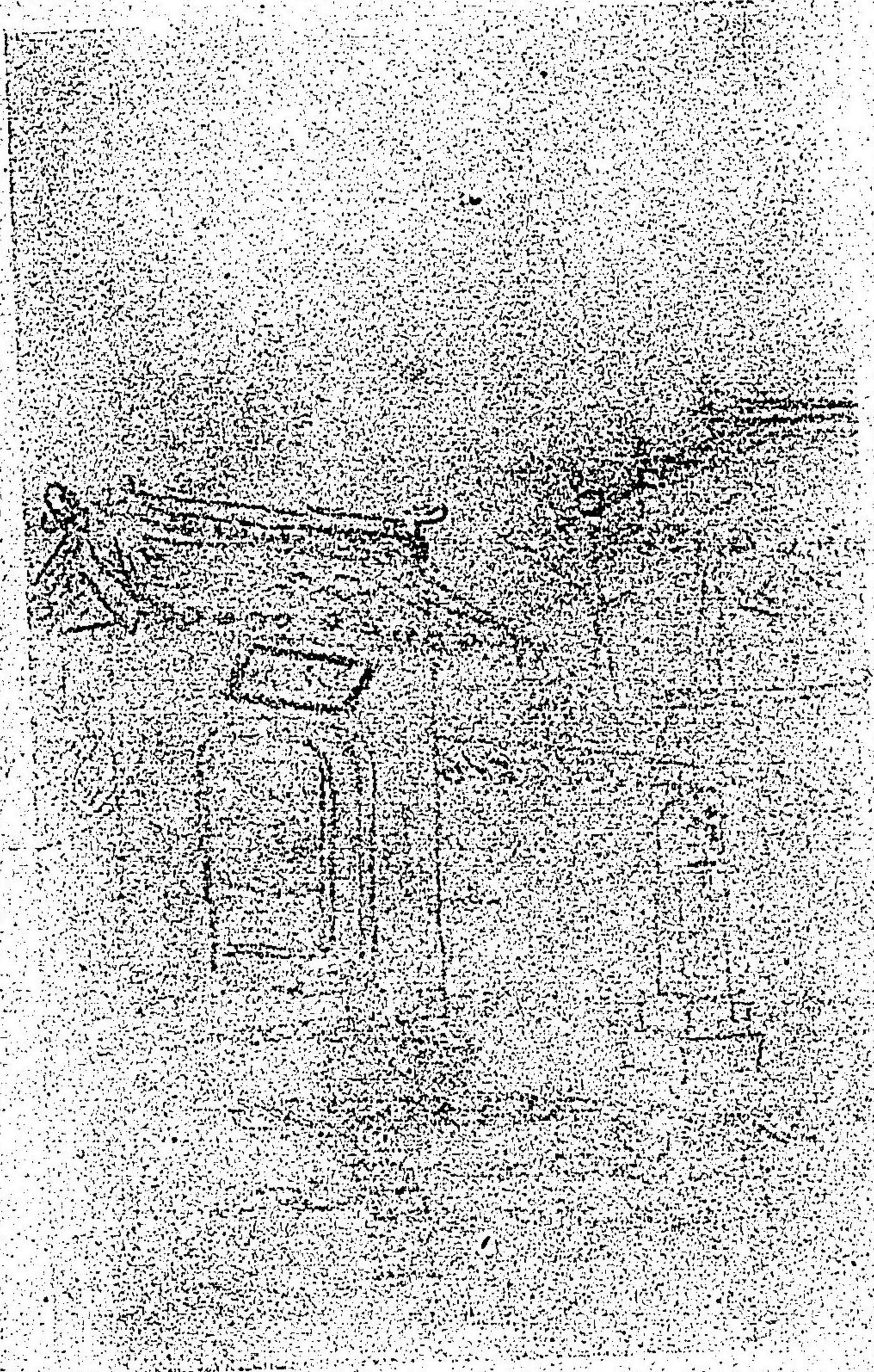


久米寺多寶塔



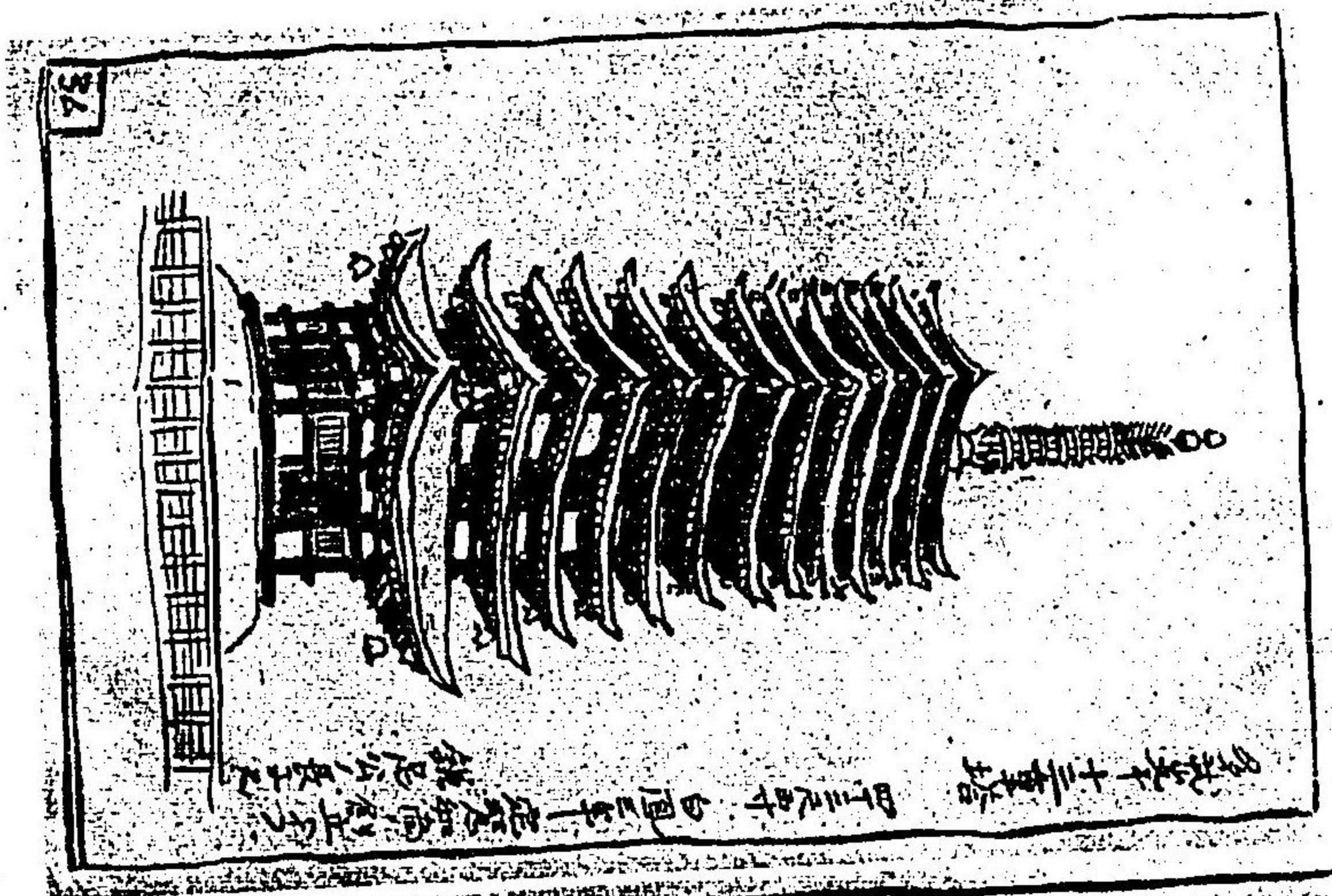






帶 解 地 藏





佛塔十三層塔  
 白河寺 定長寺 定長寺  
 定長寺 定長寺



白河寺  
 定長寺

多武峯

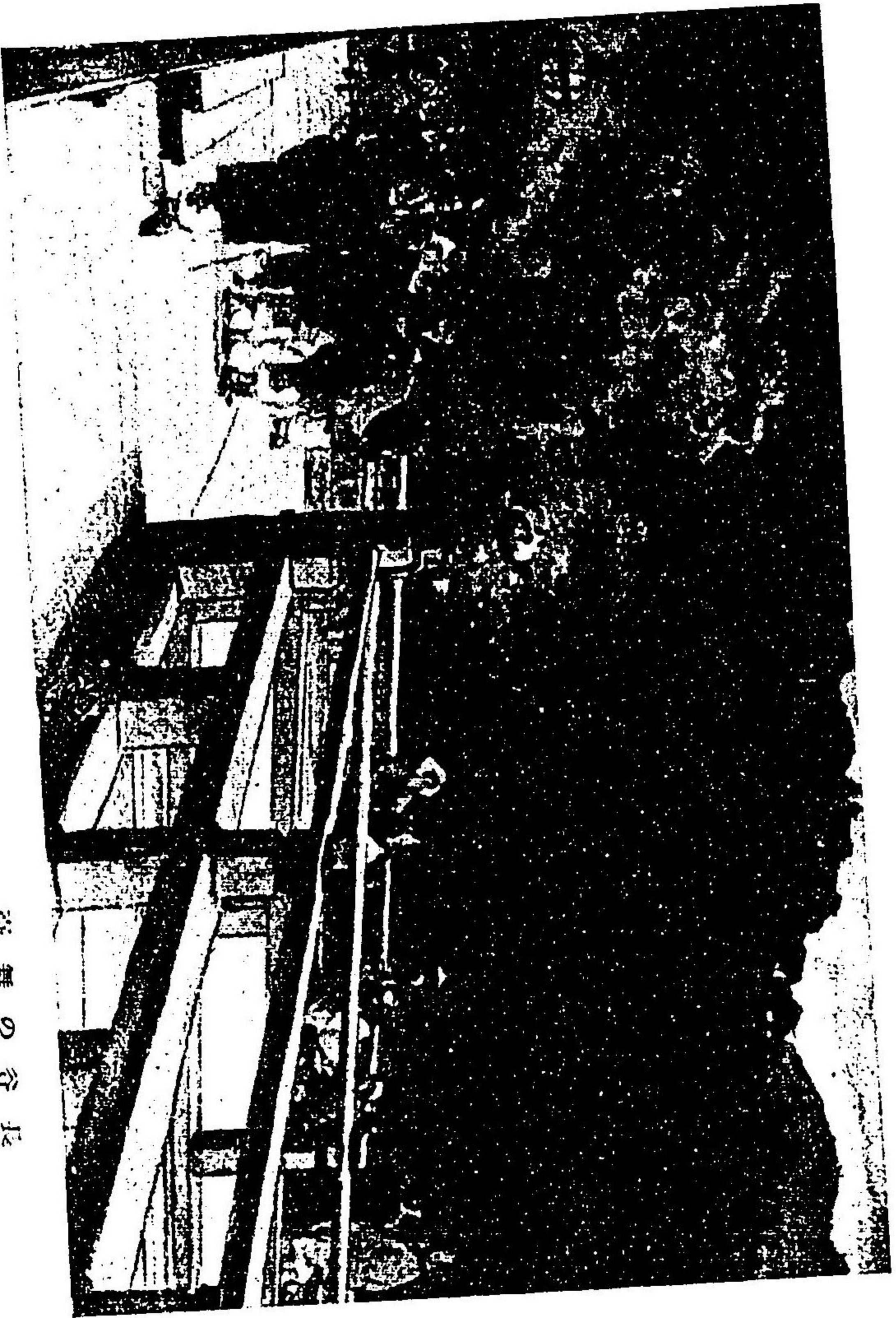




長谷寺廻廊

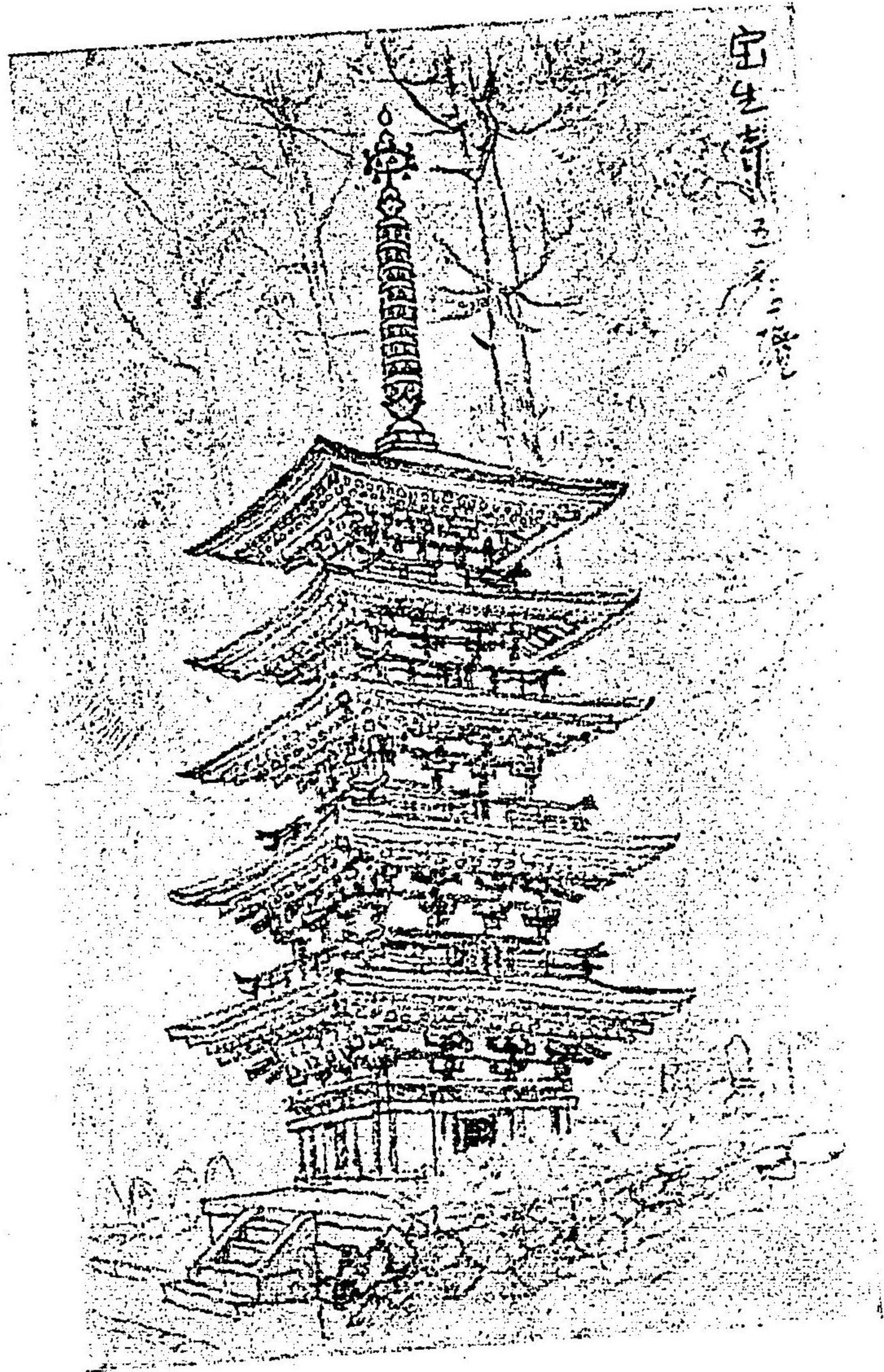


光弘澤中



空舞の谷長





宝生寺の塔

宝生寺の塔





波 の 田 六

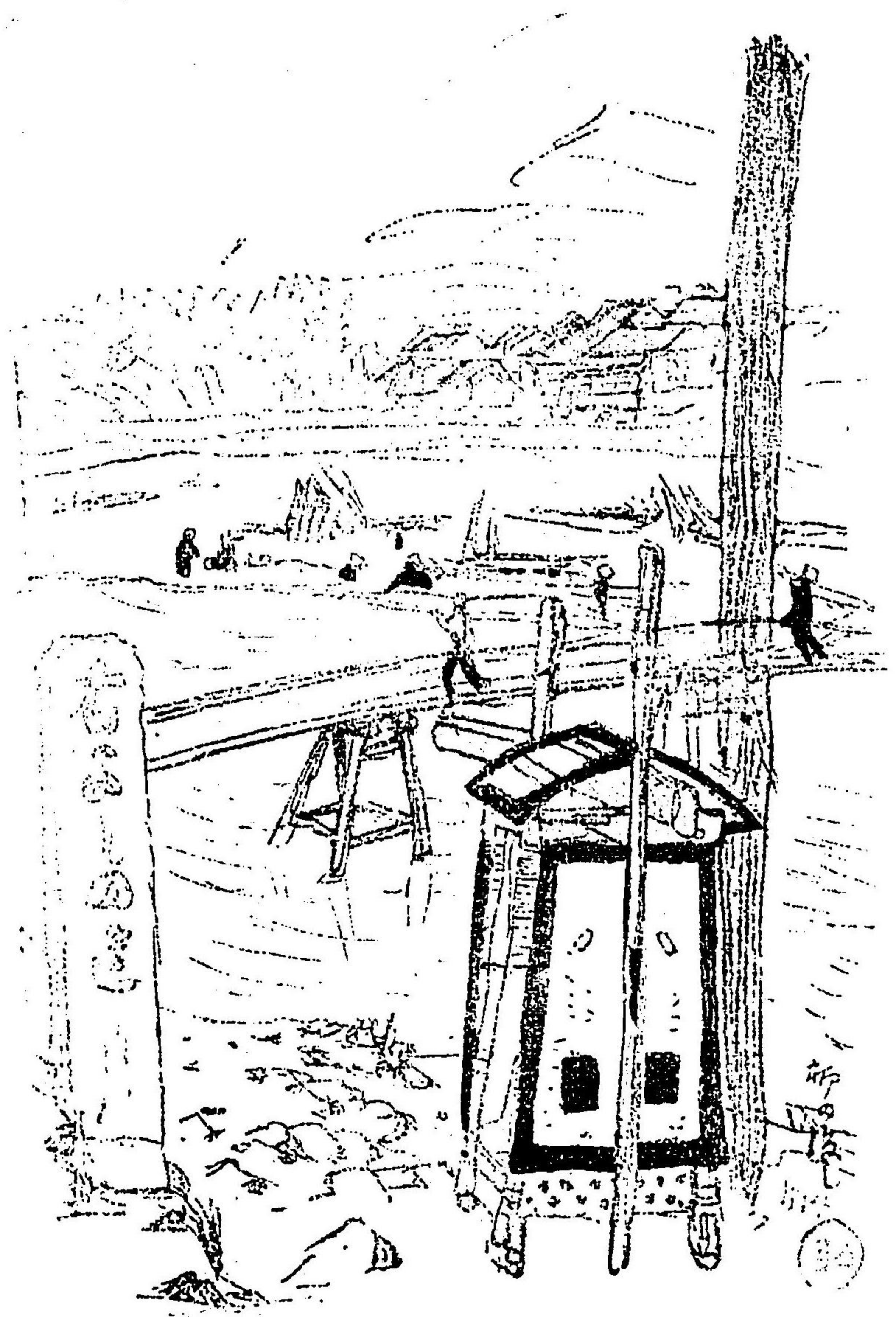




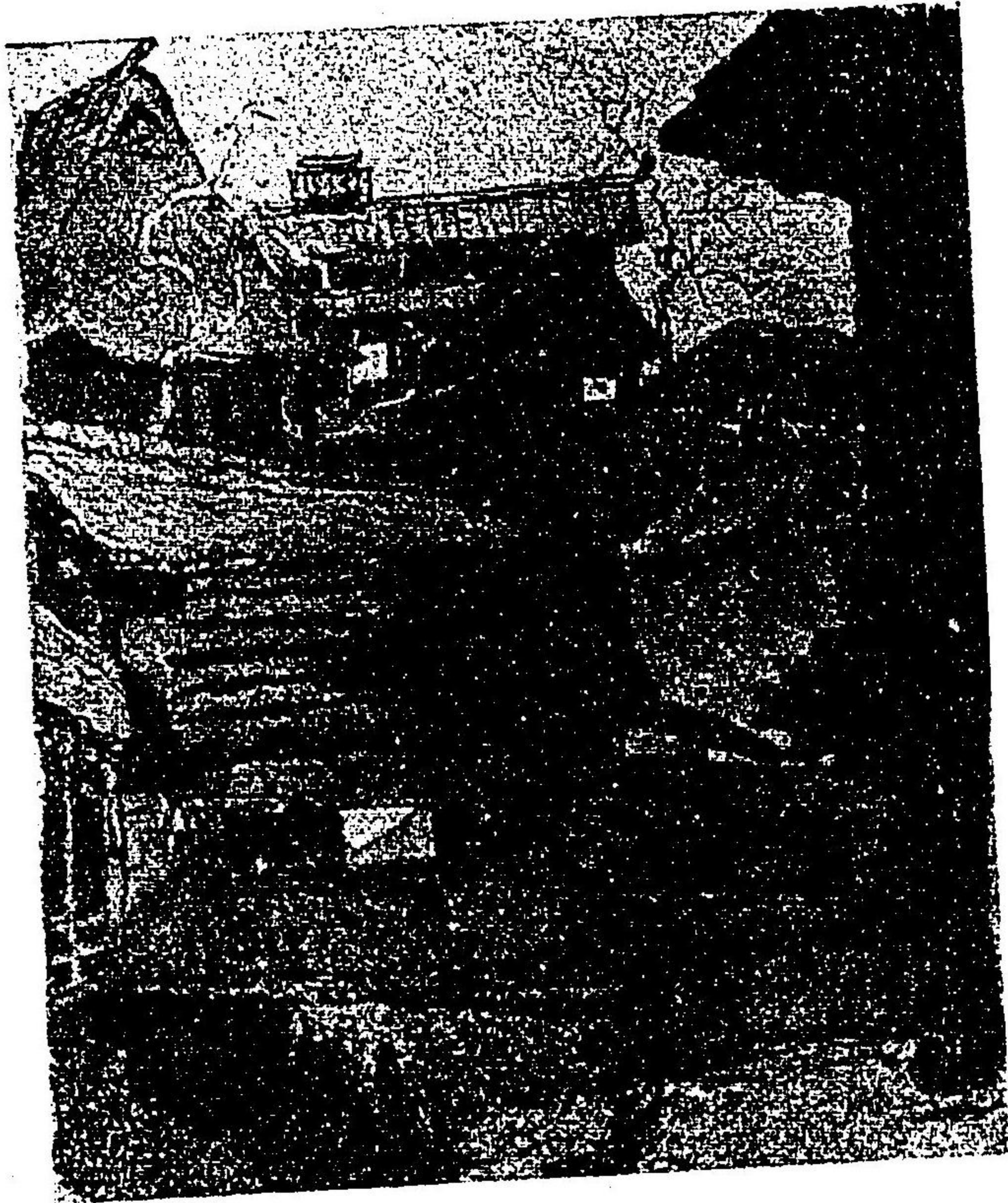
忠 井 淺

野 芳









吉野山入口





吉野山

1871





吉野口



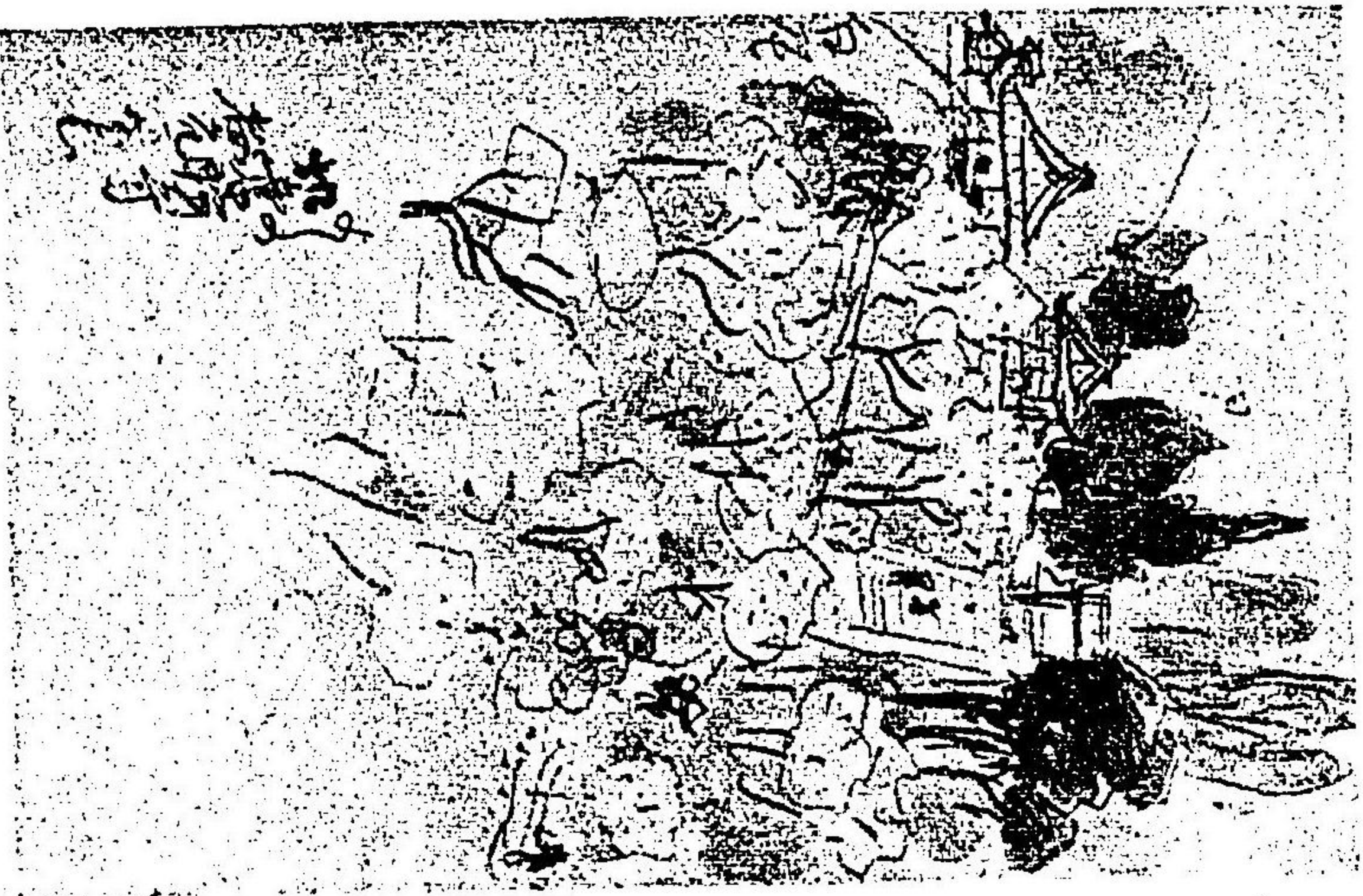


吉野山

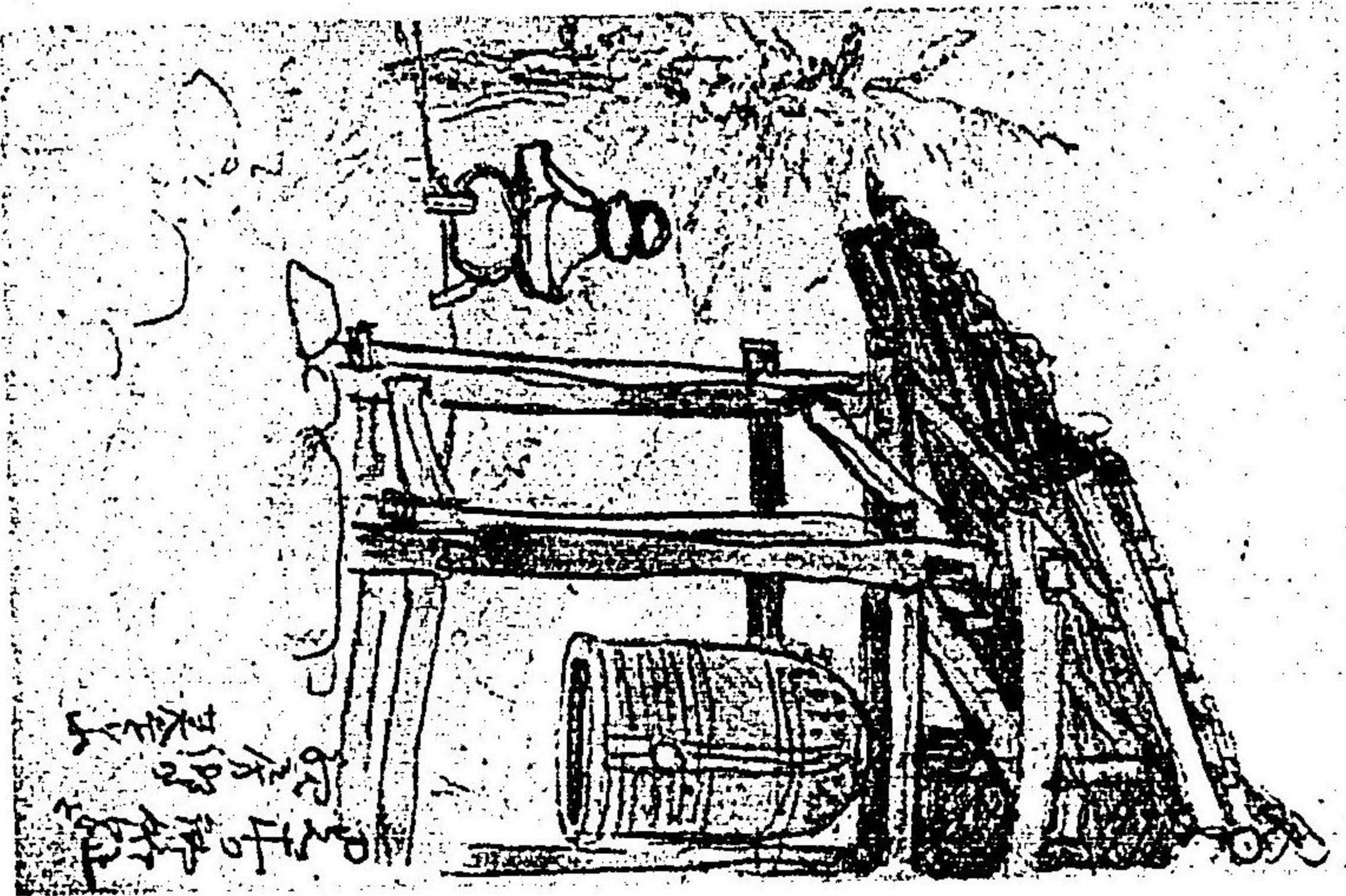






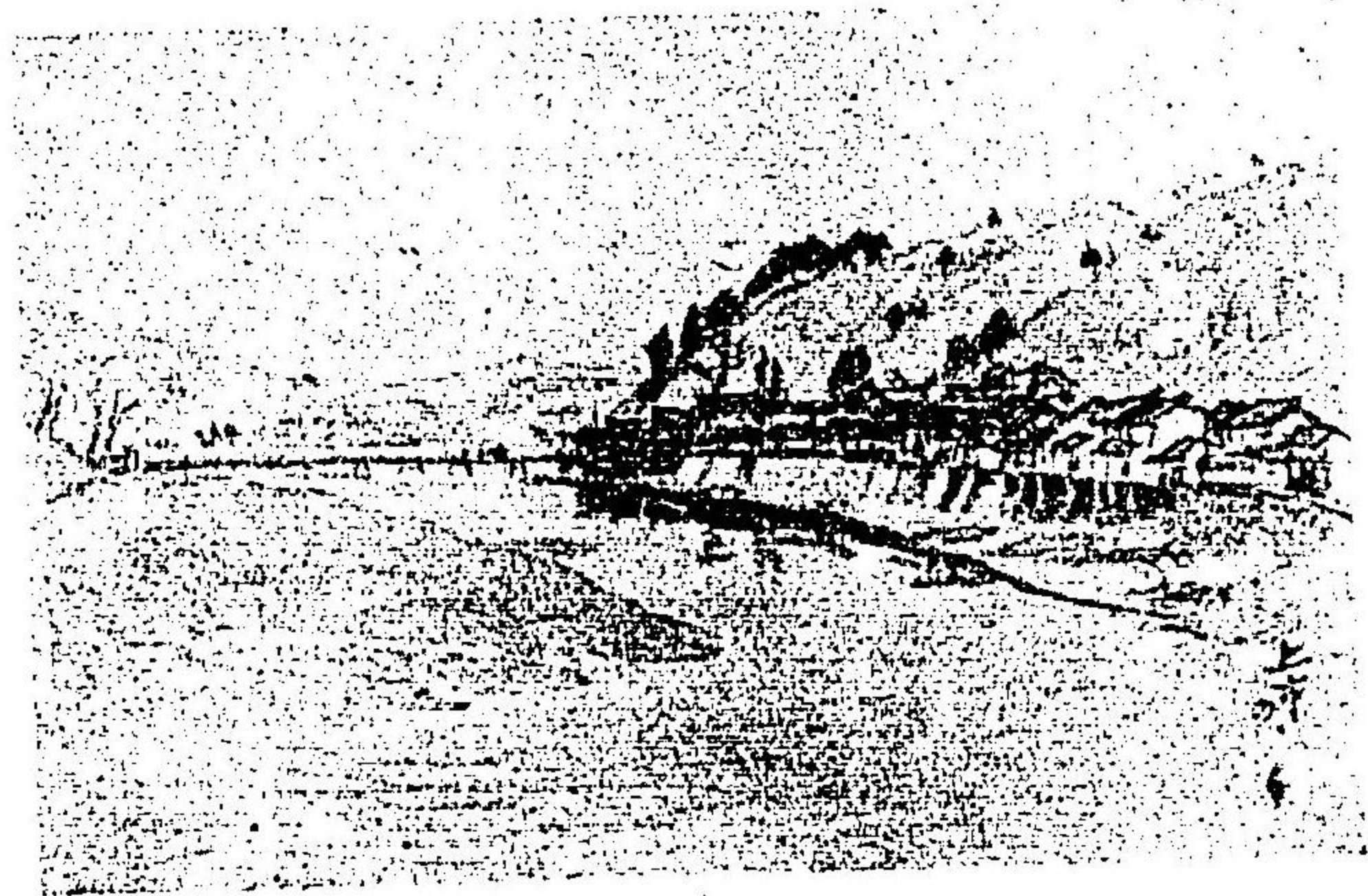


如 意 輪 堂 遠 望



黒 木 御 所





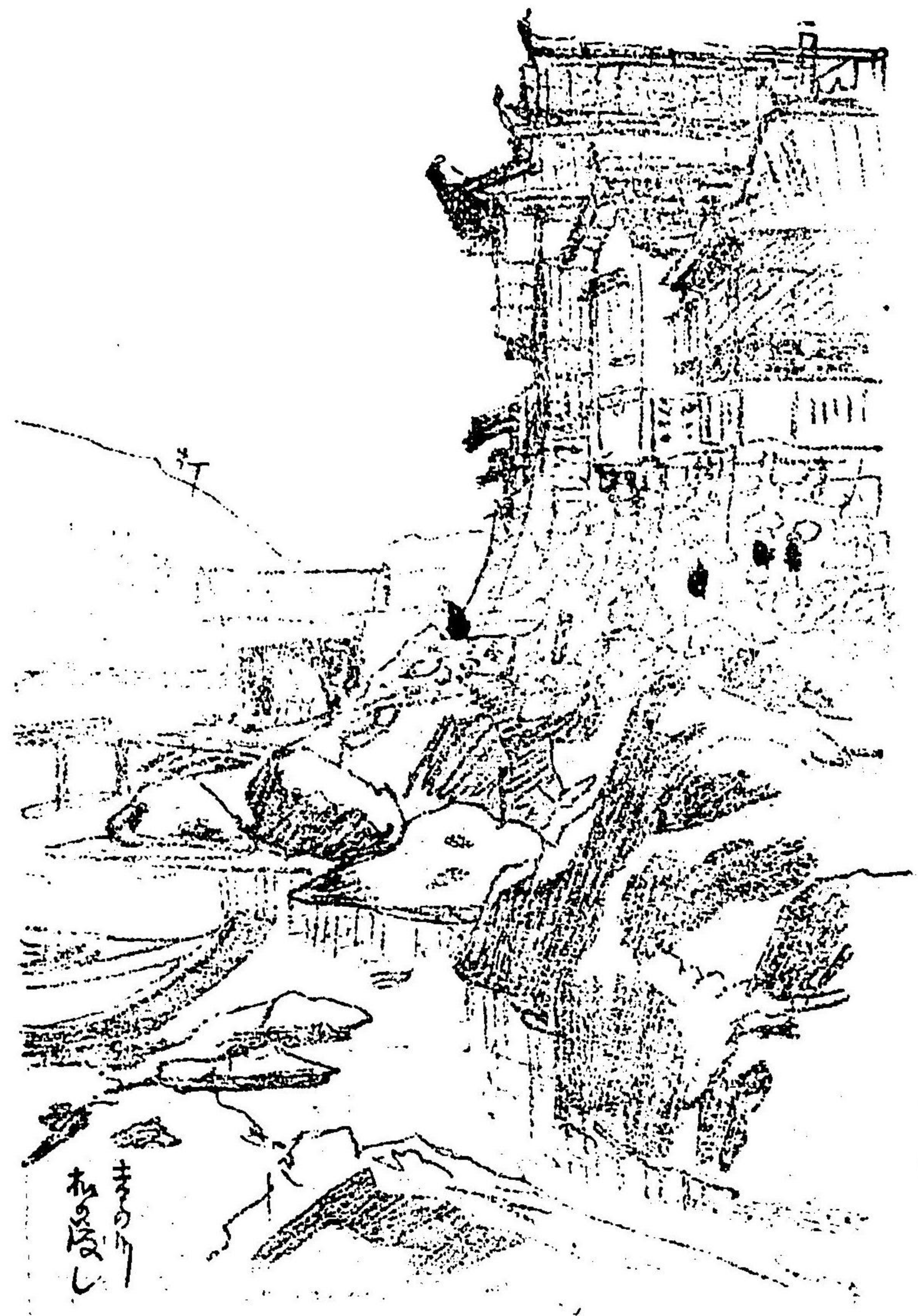
山背山妹  
市上





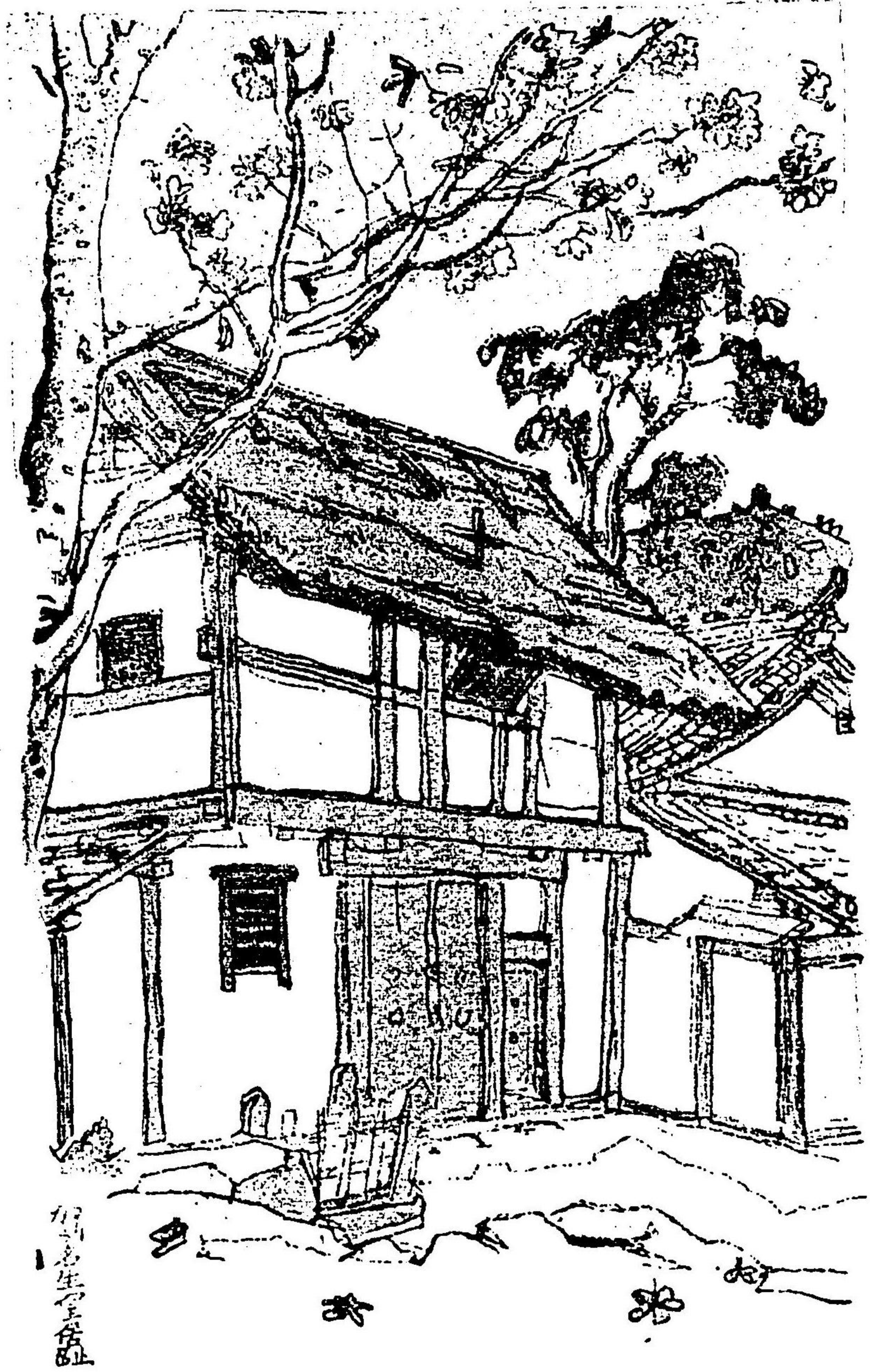
池 崎 崎



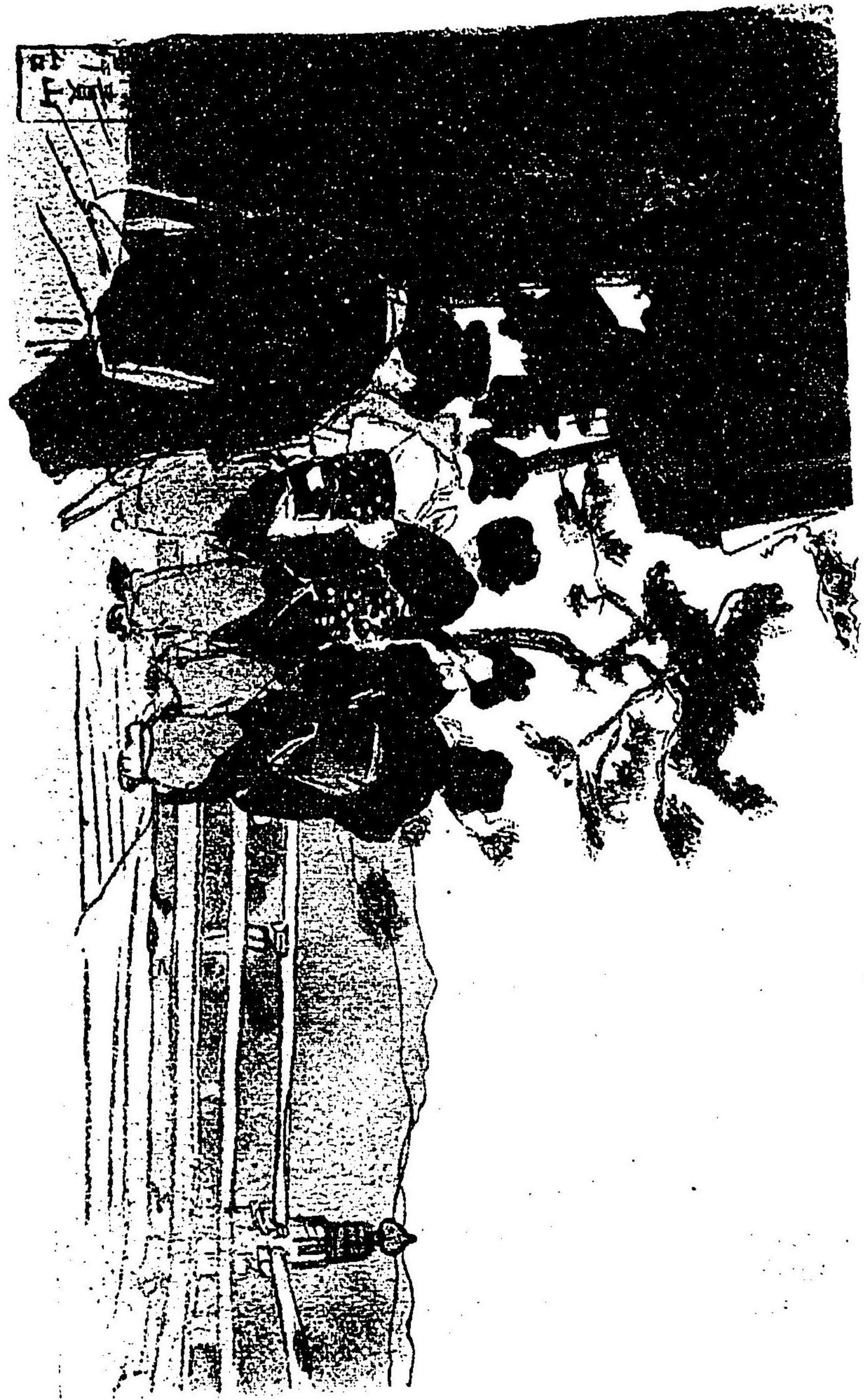


寺の塔  
松屋



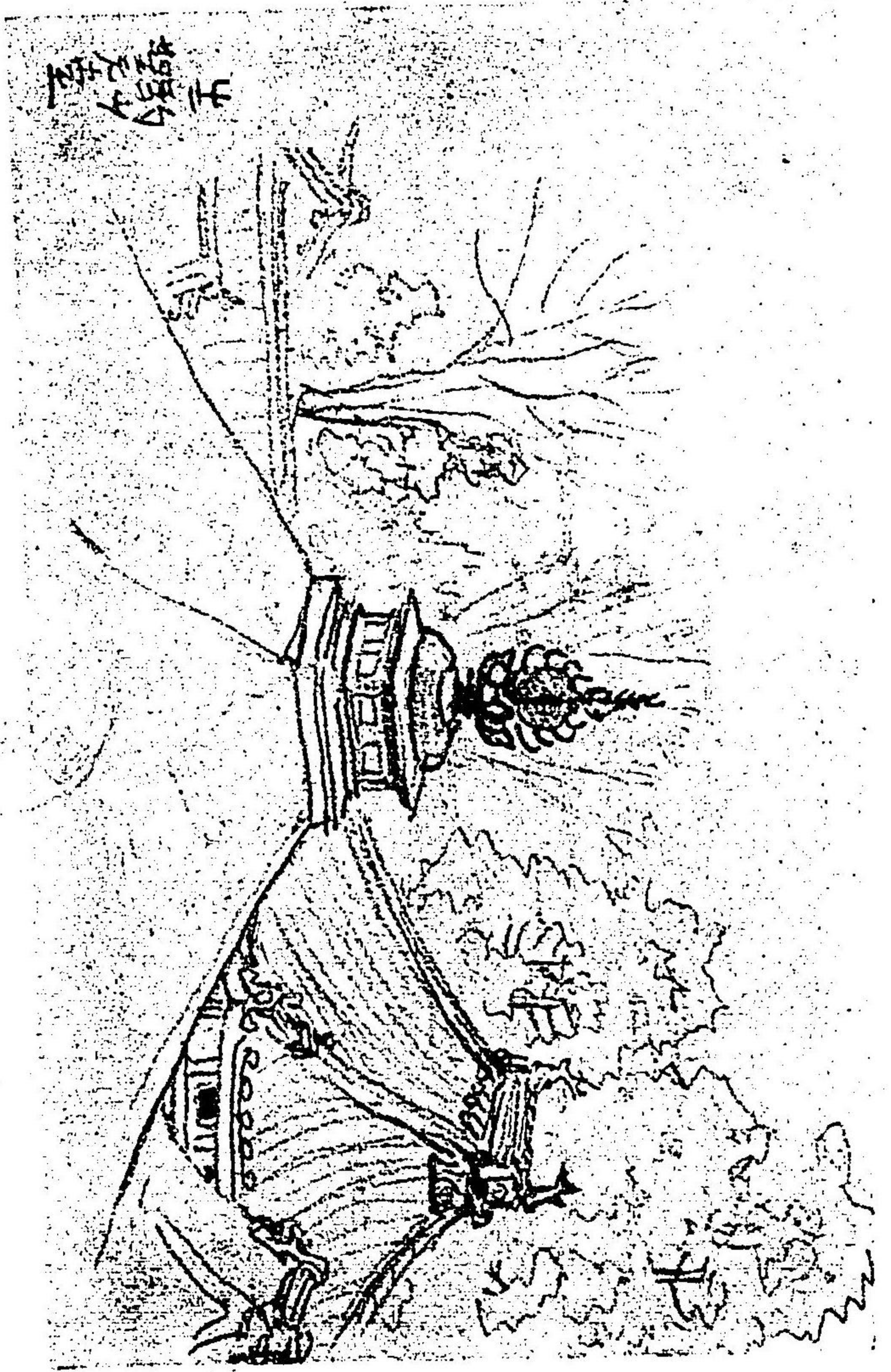






1914





生  
天  
聖  
堂

生 天 聖 堂





生駒山腹



畿内見物

大和の巻

中	與	薄	高	淺
澤	謝	田	安	井
弘	野	泣	月	
光	晶	堇	郊	忠
	子			



朱の都

高安月郊

物見内観

法隆寺

今の人間の悲劇を載せて走る汽車は数町の向を往復する。此所は汽笛の聲より、龍田姫の讚嘆の寶鐸、風神の唱和の笈笈候、金堂は殊に過去も未來も無い常寂の三尊に、鬼を踏んでも温和な四天、星を流して消えぬ天人、悲劇を解脱した諸菩薩が壁にまで並んでゐる。

蓮、忍冬、鳶尾花、唐草は一面に榮えてゐる。

微妙の氣は花の香か、法の薫か、抑々空の息か。

更に見ると、三尊の顔は蝕んでゐはせぬか。光背は曇つてゐはせぬか。四天の袖は濕つてゐはせぬか。天人の衣は破れてゐはせぬか。菩薩の畫は壁までも解脱してゐは



せぬか。

人間より悲壯な悲劇を見果てた後の様な心地がする。

創立者は人間の悲劇を見透して、此伽藍を立てたか。

其伽藍も今は解脱より、悲壯な感と興へるとは——吾詩情の爲か、今の宗教の衰頹

の爲か、抑々宇宙の真相にも永劫に悲壯な分子を含んでゐる爲か。

夢殿を叩いて、いかなる夢を残されたか、いかなる夢に入られたか、秘密の心を尋

ねて見やうと、堂を出ると、廻廊の西北の柱の下には守屋の首が埋めてあるといふ。

四天王の像を髮に挟んで勝た敵の霊、それも解脱して此寺の礎の一になつたか。五

重の塔、あゝ此上ではないか、太子の御子十七人、御孫八人まで、時ならぬ夢に入ら

れたのは——しかも太子が庇はれた蘇我の子の爲に殺はれて——

創立者は人間の悲劇を見透して、自家の子孫の悲劇を見透さなかつたか。

それも見透して此伽藍を立てたか。

其伽藍も亦悲劇の道具とは。

それも空と天壽の國に微笑するか。

それも空と其子孫は現世の中に遁れもせず、戦ひもせず、天樂を追うて消失せたか。

人間を解脱して尙残る思想の悲劇？

肉身を刻む此悲劇は思想の上にも悲壯な點がある故ではないか。

皮相を戦はす此悲劇は真相の底にも悲壯な因がある故ではないか。

悲劇の跡に立つて、永劫の真相を見透すと、悲壯極まつて崇高な感じがする。

悲壯が無くば、崇高も無いか。悲劇が無くば、理想も無いか、崇高な理想が悲壯な

悲劇の極致か、抑々慰藉かと問ふと、風神は黙つて、寶鐸のみ更に靜に、何姫か鳴ら

してゐる。



薬師寺

左には鳩羽色の雲が樺色の雑木林の丘の上に垂れてゐる。右には常盤の木立の上に、一層常盤顔の塔が立つてゐる。間は野、刈られた稻が垣になり、帳になり、其陰に村の兒が更にそれを枕にして、横になつてゐる。

振分髪はあるか。ひさご花はあるか。櫻をかさす櫻兒が二の門に迷うた道、日かげをかさす鬘兒が三の徑に惱んだ道、紺の風呂敷包かたげて旅商の女が二人話しながら行く。

あの包の中に香囊はあるか、寶髻はあるか、誰も出て問はぬ粗壁の家、柿が髻華の様に茅葺の屋根を飾つてゐる。

此所は平城の都、右京二坊大路であつた。今は荒廢の都の一坊か、二坊か、位置は變らぬ薬師寺を叩くと、瑠璃宮とした額、光明皇后のかと聞くと、孝謙帝のといふ。

しかし中には薬師如来、四天と、製作の時助力したといふ鬼形の者まで、臺座をめぐつて、いづれも無言。

左の池の中の堂には凡人の二倍もある佛の足跡、讚美の歌も結晶して、側にあるが、皆無聲。

詩も、宗教も生滅を免れぬか。落葉は古の歌人の様に滅を嘆いて、屋根裏の白い鐘樓を叩いた。しかし鐘は無常と響かぬのは、錆びて、殊に裂けてゐる。

塔は古の宗教家の様に、生滅を見下して、冷然としてゐる。しかし落葉も、破鐘も、悠久の生の断片では無いか。

塔すら生滅を無視して、しかも屋根の上の水煙に生の氣を立てるでないか。断片も空で無い、滅も生の兒である。滅を嘆く聲は是生の詩ではないか。

宗教は衰頹しても詩になる。詩は廢墟の中で宗教になる。自分は廢墟の中で、盛都の中より多く悠久の生を感じた。

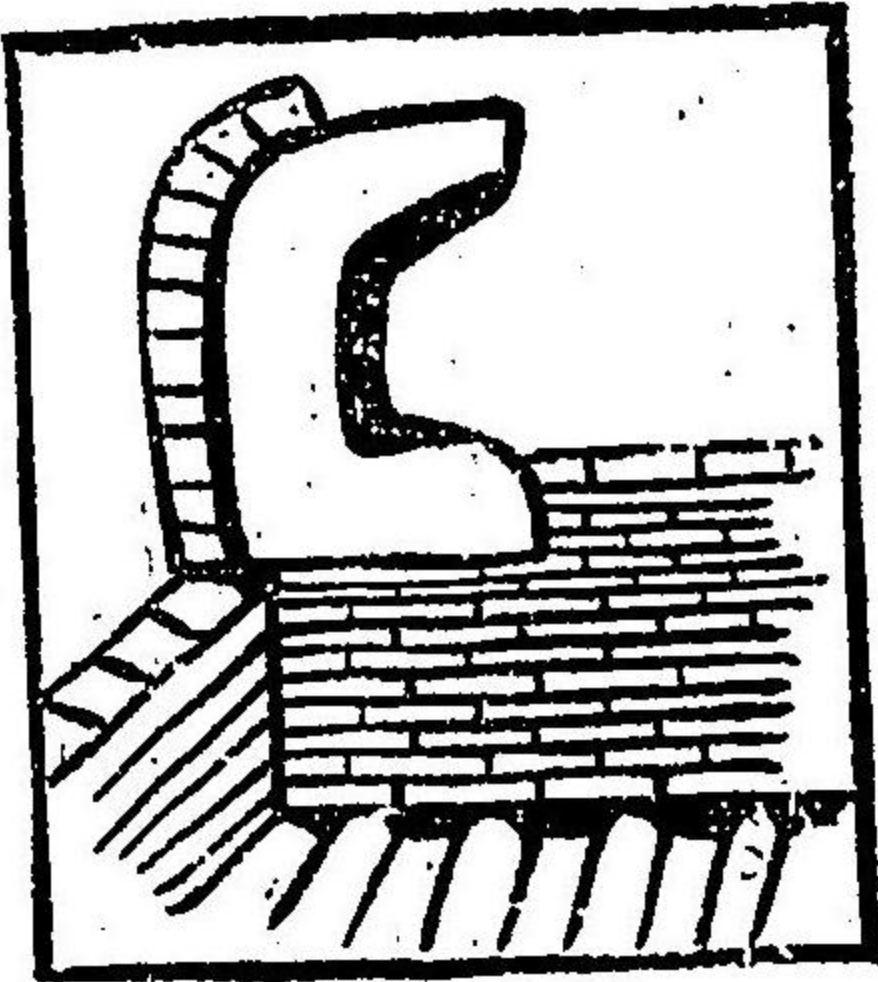


さては佛の盛衰も、都の變遷も、文明の興廢も生の表現、塔よりも落葉に問ふて、其上に名のみ残す人、名も残らぬ人、兎に角有た人の痕を認めると、全く無かつたより、なつかしい情の色々、歌も、戀も、恨も、嘆も、罪も時雨に洗はれて、哀も美しい、薄衣を隔て、しかも手を執る古今の歌垣、それもまた悠久の心か。

落瓦に躓いて、行くと、滅の兒はまた兩側の扉を崩し、門の扉は横さまに掻きむしり、坊々は何所へ吹いたか、偶残すものは農夫に與へて、立關に濫柿が釣つてある。裏門を出る、忽赤い日の丸の旗。外に白地の旗が二三本、一軒の農家の前に立てゝある。

見ると、「祝某君之入營」  
あゝ古寺の裏からも新兵は出るのである。

新編  
新編  
新編



唐招提寺

寺々の女餓鬼申さく

大神の男餓鬼たばりて其子播さん

某の朝臣を嘲つた歌は事實になつて、餓鬼の子は播殖したか、悠然たる塔も食はれた、莊嚴な戒壇堂も食はれた、清淨な祈禱所も食はれた、醍醐味泉は無論であらう。唐招提寺は僅に残す金堂に、講堂を覗くと、天人が天降つて作つたといふ千手觀音は指も噛まれてぬ様な。

鬼も天人の手にはさはれぬと見える。  
鼓樓も満足であるがこれは「時の」太鼓を打つ爲にわざと残してあるのか。  
案内の若い僧は特に禮堂の秘佛を見せた。鬼は固より、現の風にも當らぬ丈、蓮臺



の一片も落ちてゐぬが、餘りの秘蔵に、昔の少女の様な不満足の香が残つてゐはせぬか、しかも佛の情人は餘りに多く、變り易く、橘は藤原になり、平家になり、源氏になり、北條になり、足利になり、豊臣になり、徳川になり、今は年に一度の秋念佛に扉を開くと、隨喜の涙をこぼすものは、此あたりの徳の生へた老人ばかり、偶焦れた様に顔を見るのは、藝術の參考にする藝術家ではあるまいか。

佛像は完全に残つて、藝術品になるとは——いや、それも自知つてゐやうと、扉を閉ぢると、天井は「解脱天井」といふ。

僧は人なつかしげに、様々の物語して、舍利殿の片隅の自分の部屋へ招じた。床には楠の墓碑の石摺、坐をめぐらして種々の植木の小鉢。

彼はこれを友としてゐるのか、愛してゐるのか、新聞は舞込むまいが、過去の英雄は經机の上に何を語る、蓄積をかざした人は見物にも来るまいが、植物の精は夢に入らぬか。

彼は二十前後である。

同じ棟の二の堂に、彼方には秘佛一人、此方には若い僧一人、秘佛の鍵は持ちながら、蓋には開かれず、自身の胸の鍵は何者が持つてあらう。

彼は秘佛を撮つた寫眞をくれた。更に此寺の七不思議を語る。「片葉の蘆」「乾の蛇の井戸」「鬼門の辨天」石を刻んで大黒を作る「大黒虫」殊に「丑寅の門」は昔金が多く入つて來るのを厭うて、金よけに立てたといふ。今は塚も多く崩れて、風も吹通す。しかし門は其儘にあるといふ。

餓鬼は何と歌ふであらう。  
戒壇堂は再建ち相も無い、龍も枯れ、魚仙も寒相な彫刻のある門が、破戒の心の様に倒れてゐる草木の中に残つてゐるのを見ると、滅の兒も中々藝術家である。



法華寺



夕日は昔男の入るを禁じた山門の外に落ちた、堅く閉じた法華寺の本堂尼は我等の爲に開いて、更に三拜して厨子を開くと、十一面観世音の立像、逆華の光背は反射せぬが、神聖に美しい容顔、片手には水瓶を持ち、片手は膝よりも長く垂れて一點の

色彩も無い衣を掲げ、少し歩まうとせられる体は、十八町の長廊下鴨の毛の屏風立て續けて、東大寺へ通ひ給ふ途中、日かげの洩れる丈の隙を此前の池へ寫して、摸型にさした光明皇后の面影とか。

あゝ皇后を摸型とした観音、観音の摸型になつた皇后！  
 現身の儘の佛、佛の儘の現身？  
 現實は直に理想になつたか、理想は直に現實に合うたか。  
 今神人といひ、人神といふのも、此一致を新たな姿に求める聲で無いか。それを千年の前に得て、千年の後に示し給ふとは。美の爲か。善の爲か。智の爲か。美丈では此祟高があるまい、善丈では此優美があるまい。智丈では此典麗があるまい。美も、善も、智も、理想も、現實も、宗教も、藝術も、歴史も總て融解して、かの秋篠の落葉から、奈良の博物館の玻璃箱に移された技藝天女より、微妙の喜悦を與へるのである。  
 小町はこれを拜したか。紫式部は？ 和泉式部は？ 抑々袈裟は？ 常盤は？  
 政子は？ 淀君は此堂を修復したといふ。彼等は何と感じたであらう。



側に虫ばんだ紙の衣を来て目を閉ぢてゐる尼の像がある。  
案内の尼に問ふと、横笛といふ。

さては千鳥が淵に沈んで、いつまでも嵐山の戀の精靈となつてゐると思ふたら、朽葉色の被衣ばかり水に散つて、現身は此尼寺へたどつて來たのか。理性にはかなうてゐやうが美が足らぬと思ふと、尼は其衣を指して、これは瀧口入道と往復した消息を末期に継ぎ合はせたものといふ。

さては一たびは死ぬ程恨んだ戀人もおのづから道に入る導師となり、此所と高野と何十里か、復會見はしなかつたであらうが、互に勵まし、慰め合うたか。何方から始めたか、始めて書きかけた時の心、受取つた夕暮の感じ、嵯峨野とは違つた露にあの時の恨も解けたであらう。

それから年に幾度の便、其昔の御所に仕た春よりも深く身に染む冬の夜の鴈が音、情めいた言葉は無からうが、道を説く文句が情、情につゝる理の裏をくりかへして、現身の戀は精神の交となつたか。

何方が先へ此世を去つた。心の痕の幾十通、末期に抱いて行くも耻づかしい様な、さりとして自分ばかりが眞の意味を解く文字、殘して人に見られるのも惜しい様な、繼いで衣にして自分の面影に着せるとは。

彼も遂に女である。

十一面觀世音も何と見られたであらう。

しかし其顔は未悲し相である。現世では得られぬ戀、死を買いて永久の命を求めて行つた方が好かつたか。一人に注いだ情、衆生に及ぼして眞如を抱く方が好かつたか。女は或夜觀世音の前に伏して、文には忍んだ涙を流したであらう。  
觀世音を透して、光明皇后は何と見られたか知らぬ。



佐保村

日は落ちて西の空の美しさ、髪を剃立の若い尼があきらめてゐた戀を問はれた様  
な。

東はまだ迷うてゐる現世の兒の夢を洩らす夕煙、其中へ入つて行くと、夢の真中を  
断つ細い流も暗く、較廣い街道の兩側、夢も高低不定の葺屋の上に醒めかけた靈の一  
片の様な月が傾いてゐる。

これは愈醒めて行くか、抑々夢と消えて入るか。

夢に入つても消えず、醒めても氷らず、醒めて夢を見ると夢も美しい。

昔の恨も、今のわづらひも、後のあこがれも同じ此夕煙、醜い所は消えて、夢ばか  
り立つのを見ると現も美しい。

人の哀も、自分の嘆も、悲も、苦も同じ此西の空、不快な所は消えて、思出ばかり、

微な雪を見ると、現も夢もなつかしい。

苦しい思出でも無かつたら、いかに此夕暮が寂し過ぎるであらう。夢も續かなかつ

たら、いかに此月が冷過ぎるであらう。

夢は現の銀の線、思出は靈の紅の絹——あゝ絹を裂く聲は鷹か——それも月より西

へ行く。

村を過ぎると、佐保の河原であつた。





三月堂

三月堂は十二月より陰森な氣が籠つてゐる。不空絹索觀音始め、二天、四天はいづれも丈餘の立像、其中をめぐると、理想の神人の間に交る様な。

しかしまた幽冥の界の様な。

理想は幽冥の界でない、完全にならぬものか。

我等は神人を現實の界、青天白日の下へ出したいと渴望する。しかし此儘では古物館の玻璃箱の中に囚はれはせぬか。

さては新しい衣を着せねばならぬか。

それでも復精神的に礎柱に上されはせぬか。

さては新しい藝術として復活せしめるか。

それで昔の宗教の威嚴を備へる事が出来るであらうか。

昔の宗教も宗教家の神格で威嚴を保たから、新しい藝術も藝術家の人品で威嚴を備へ

備へる事は出来る。しかし一層美しい象を具へさせねばならぬ丈、それ丈現の界に完成しやうか。藝術も幽冥の界でない、完全にならぬものか。

幽冥の完全は現實の不完全、しかも靈は断えず象を作りたがる。象となると空、空となつても作る。創作が靈の情か。空が象の弱點か。

しかし空から空に入る不空の力、空即不空。夢から夢を結ぶ現の象、夢即現。宗教といひ、藝術といふも同じ靈の象か。昔の神人が藝術となつても空で無い。後

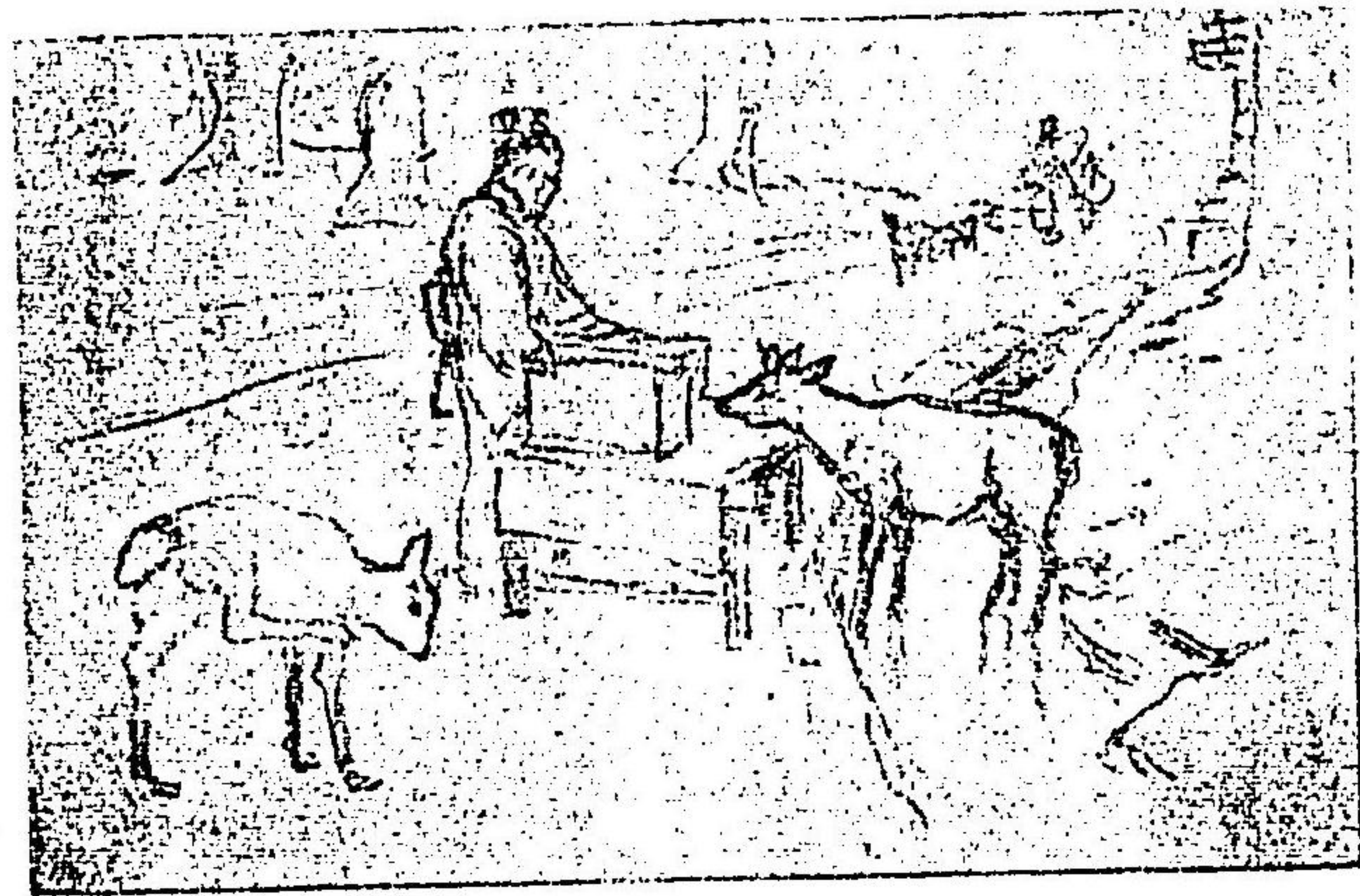
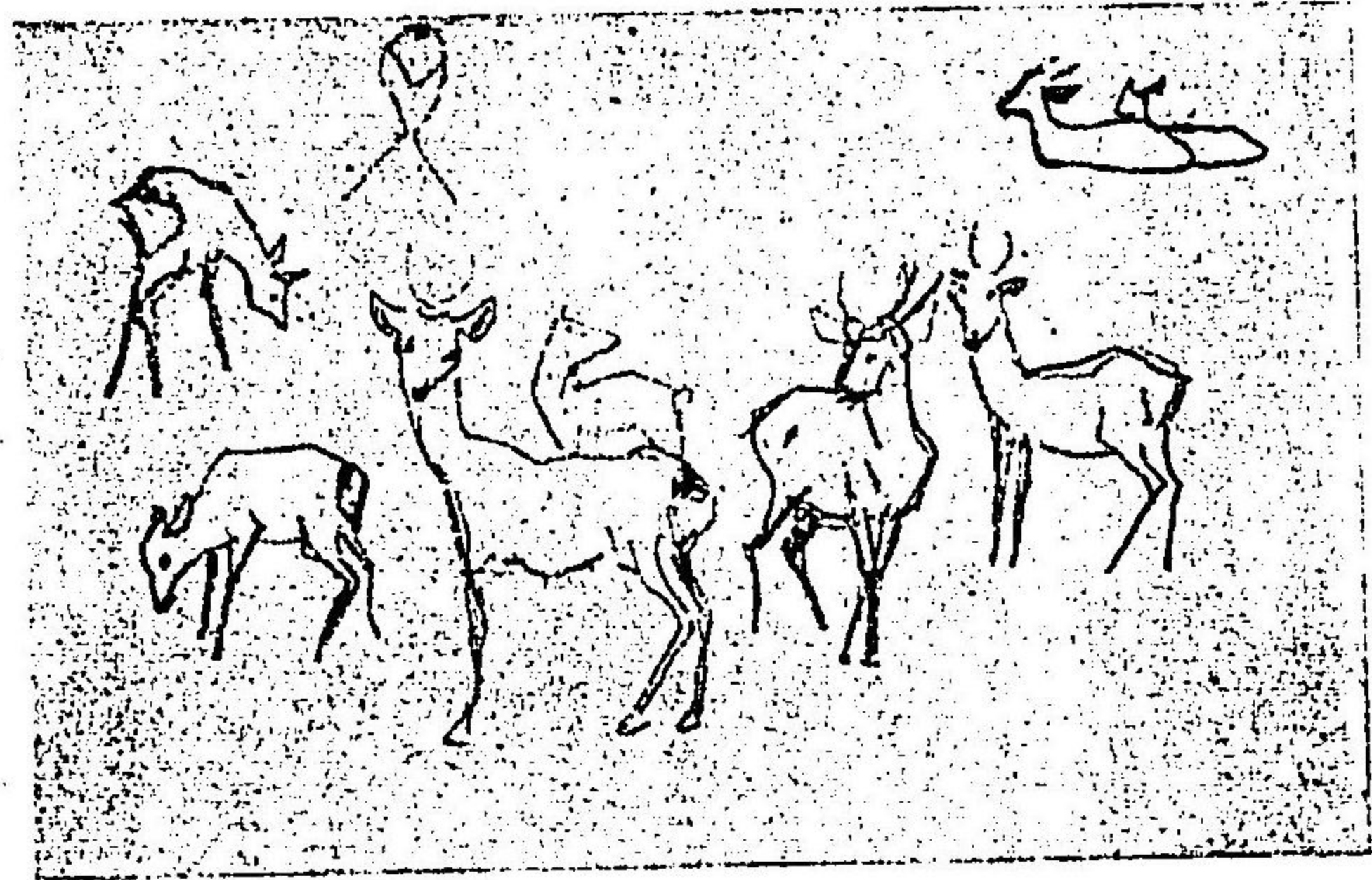
の藝術が人神となるのも夢であるまい。

幽冥な現の界をめぐると、目を張り、口を開いて、片手を突出し、片手に杵を振りかざす執金剛神、抑々何を突かうとするのか。彼も一度蜂になつて、現の戦を助けたとか。赤い顔は稍剝げ、険はたるみ、手を合はせて愁然たる梵天、これは何を念ずるのであらう。更に廻ると、何やら足らぬ様な。

象にか——表情にか——光明にか——

何と問ひもせぬ幽寂の堂、外へ出ると、外も内と變らぬ薄暗い冬の日かげであつた。







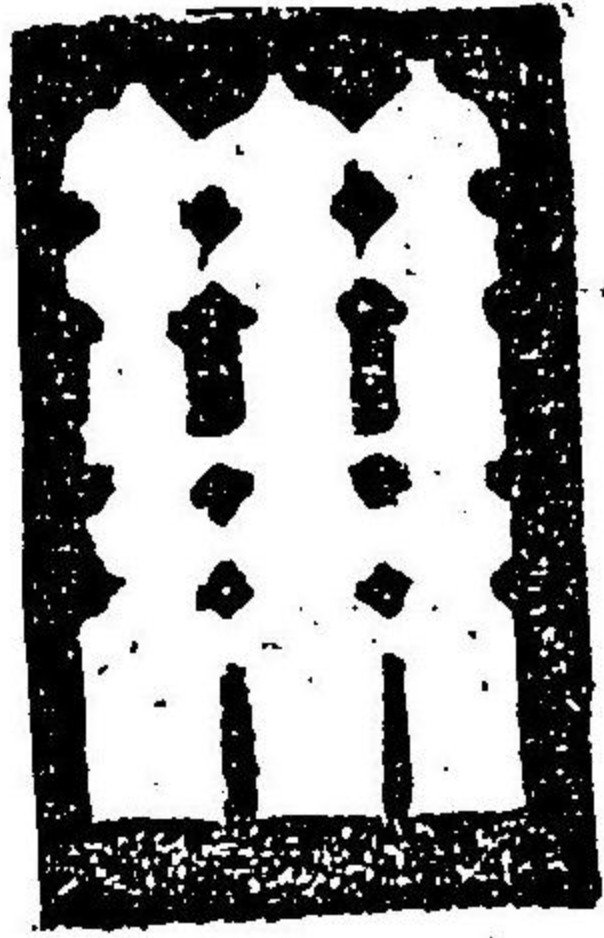
## 冬の春日野

薄暗い冬の日かげに春日野を通る。

鹿も通らぬ草村、狐でも招くか、薄は亂れ茂つて野の名を嘲つてゐる。これでは妻と籠つても、焼くに焼かれぬかも知れぬが、また露も問ふ上臍、籠もるには餘りに凄いであらう。戀の跡は戀よりも亂れて、忍指の若紫、その色は何所に？ 色から色に移る昔男、眞の戀は何？ 彼は遂に戀を解したか。戀を解して現の世に得られたか。戀も幽冥の界に入らぬと完全にならぬものか。

幽冥の戀は現實の哀、しかも靈はいつまで戀になる。戀も亦靈の情か。夢と現とを合はせ、空に不空を抱く力の象か。戀も藝術も同じ靈のあこがれかを見ると、堂か、御殿か、一面ばかり残る粗壁、それも空の齒に噛まれてぼろ／＼になつてゐる。しかしまた鳶が齒の痕を縫ふてゐる。

壁は遂に崩れるか。鳶は能く繋ぎ止めるか。  
鳶は永久の情の様に深紅である。  
しかしまた餘り紅で血の様である。





### 大佛の顔

自分は大佛と顔を見合はせた。

いつもは膝の下の、蓮臺の下から見上げるのであるから、十分に見られず、寧殿堂を徹して、青天を屋根に、春日山を戸にした方が好からう、殿堂がある丈に恐人に焼かれ、火に焦され、雨風に破られると思うたが、其破を修繕する爲、今足場を掛けてある、自分はそれに登った。塔へ上るより危ない様な。弱い簀を踏むと、板も緩む。細い丸太を渡ると、それも動く。隙間から見下すと何十丈？ やうくの事で膝は腹になつた、胸になつた、咽喉になつた、顔になつた。

自分は始めて大佛と顔を見合はせた。

あゝ何といふ調和！ 下から見るとは餘りに莊嚴に過ぎて、衆生を憐む慈眼も膝下には垂れぬかの様に思はれたが、此邊で見ると、いかにも慈悲もある、平和もある、餘

寂もある、圓滿もある。

彼と同じ高さで無ければ、彼の眞面目は分らぬか。

自分は更に登つて大佛を下に見た。

何といふ崇高！ 三千世界を見渡す慈眼

も下になつて、超越もある、解脱もある、

快活もある、入神もある。

彼より高くなければ、宇宙の眞面目は分

らぬか。

彼は忽立上つて更に高くなる様な！





神 子

瀧阪の紅葉を見て、また春日の社の南邊まで戻ると、左に低い土塚がある、それも瓦は落ち、所々土も落ちて中まで好く見える、中は一面薄である。更に向の遠山まで見える。大濤の様で崩れぬ千古の連山を、小波の様に騒ぐ薄の向、波打際の岩の様な堀の上に見ると、いかにも自然が人間の榮華も葯藤も罪惡も「時」の波濤で一洗した古跡の名畫である。

自分は足を止めた。

日は時雨の雲を洩れた。

しかし薄の穂も今一息蘇生せぬ。土塚は更に色を添へぬ。

忽ち社の中から神子が出て来た。白い振袖赤い袴、綺麗に化粧して、しかも純潔、年は十か、九か、極無心な顔に通つて行く。

これは誰の子であらう。

橘の子か、藤原の子か、大伴の子か――

いや、彼は系圖も知らぬ顔に通つて行く。

しかし家持より、百川より、道鏡より、押勝より、何も知らぬ此一點の紅が千餘年の古跡の秘藏子の様である。

自分は彼等の靈に逢うたより、より深い物語を聞く心持。

日かげも彼の上に集まる様であつた。





奈良の道具屋

奈良の町は千餘年の影で早く暮れる、暗い道を過ぎて、或道具屋へ入ると、店は格子をさして、しかも灯も點さず、中庭は較廣いが、行燈も點さず、暗い中を奥へ通ると、愈暗い。

しかし暗い中に物がある。坐る所も無い位満ちてゐる。皆黒い。

やうくの事で亭主は行燈を點した、しかし格別明にもならぬ、唯黒い物が較同し黒さにも大小のある事を現した。

自分は見まはした。此中に光明皇后が手習の樂教論はないか。中將姫が編殘した蓮の糸はないか。積文勳が未成の觀音はないか。行基が手馴れた經國はないか。無垢淨光經の初刻はないか。人麿が石見の妻に寄せる思を磨つた硯はないか。安麿が神

代の傳説を照らした短檠はないか。諸兄が萬葉の歌を束ねた竹軼はないか。眞備が野馬臺の詩を指した笏はないか。祖父麿が鹿を戯書した畫扇はないか。宗清が銘つけた唐櫃はないか。天藤が清麿に托された劍はないか。采女が猿澤の柳に掛けた衣はないか。阪上郎女が書捨てた戀歌はないか。

幽冥は有るといふ。

何様、佛像はある、經函はある、經切はある、破硯はある、短檠はある、竹軼はある、畫扇はある、唐櫃はある、古劍はある、古衣はある、古文書はある。

よしや彼人々の物でなくとも、同じ形は其物を代表して、我等の想には彼人々の手に觸れたも同様である。

其物すら物の爲で無い、物に依つて其人を想ふ爲にゆかしいのでないか。其人すら人の爲で無い、人に依つて其心を想ふ爲にゆかしいのでないか。其心すら心の爲で無い、其心から吾心に連絡する爲にゆかしいのでないか。吾心も吾心の爲で無い、吾心から更に宇宙の心に連絡する爲にゆかしいのでないか。



宇宙の心も宇宙の爲で無い、宇宙から更に個々の心に連絡する爲にゆかしいのぞな  
いか。

さては物の眞偽を問ふまでもない。暗示となる或物があれば、我等にはそれで十分  
である。

灯はまた暗くなつた。

しかし稍見とめた大小の物は黒い中に種々の趣を刻して、奈良といふ印象を吾心に  
押すのである。



當 麻

さのふの雨は菜の花の野から晴れたが、葛城一帯の山々は行者の使うた鬼の夢の浮  
橋を懸けて、光はさゝぬ麻古の山、それを背景に三重の塔の一むらの里の上に聳てる  
るのは當麻寺である。次第上りの路を登つて山門に入り、先左手の西御堂を見た。こ  
ゝは中將姫が髪を剃つた處として十七歳の肖像がある。案内者は彼が繼母に憎まれて山  
に捨てられた傳説を眞しやかに語る。しかし彼の實母百能は長く生きてゐたといひ、  
彼の父豊成は彼の伯父押勝の爲に陥れられて筑紫へ流されたといひ、押勝も亦敗れ  
て彼の十八の時誅せられたといひ、彼も二十四歳で此寺へ入つたのを思ひ合はせる  
と、繼母の憎よりは、政權の争が其一族の悲劇となつた所から人世を厭うた方が眞で  
はあるまいか。兎に角尼になり、純精神的生活を送るべき運命を以て生まれた女  
童の時から花一むしらす、虫一殺さす、なまじひに濃い振分衆の間から美しいといふ



よりは清げな顔は春日野の若菜摘にも浮立たず、奈良の都の八重櫻の盛も臉重げに、陰を求めて秋海棠の濕り勝であつたであらう。一族の姫達は一代の騎樂を身にまとうて永劫の肉の累を誘ふに引きかへ、騎樂の裏に潜む哀傷を心に染めて、肉を透す靈の惱、共に猿澤の池に寫す姿、何といふ對照と驚く歌人は無かつたか。空海は其手蹟を學んだといふが、何様戀歌よりは寫經に似あひ、琴は堪能でも調合はせる樂人もなく、笠袴を抱いて三笠山の月に眞の故郷を探す冥想の目には、三國に金色を耀かす東大寺の盧遮那佛も銀の光となつて、雪山に苦行の太子となりはせぬか。仕へて薪拾ひたい望は父の別、伯父の敗に現となつて、磨古の山の寂光をたよると、丹塗の社より、此世ならぬ光かやく樓閣に、葛城の女神も解脱する天女の樂、靈の、姉に助られて百馱の連の糸、一丈五尺の曼陀羅に織つたのは二十五歳、吾國では始ての極樂の圖とは千年の夢が結晶したのか、更に千年の望を象徴したのか。千餘年の後の世の今曼陀羅堂の薄暗い陰をめぐると、蠟燭の灯は消えくくに、樓閣も麗、彌陀佛の光背も曇つて、天人の樂も止み、蓮の池も濁つてゐる。あゝ極樂も地獄の様に暗くなつた。しかし暗

くなつても信仰の象徴として見るには十分である、一時の肉を無視しても、尙あの世に理想の形を作る靈の情、あの世の夢を此世に實現しやうとする精神の力、法を燃ひ、道の妻となり、教の母となつた女の命、それはよし幾度複製しても明である。

寶龜六年、彼は二十九歳で死んだ、尼になつて續に六年。しかし六十まで生きても同じ事、八十までも生きて卒都婆に腰かけねはならぬ様になつた平安朝の美人の運を負擔した女より、僅の間に永久の形見を作つたのは寧ろ幸か、更に其墓を尋ねて行くと、裏門を出て一二町、民家の裏にある。三面玉垣で無く、其家の白壁、前は藪、墓は幾度も崩れたか、前はあたりに並べてあつたらしい佛像を彫つた石を寄せて、土を堅めてある。

花立も無いのは、巡禮も此所までは參らぬか。まして現實の極樂を求める今の少女は――

あゝ墓の側に白堊が咲いてゐる。  
フランヌ柳が二もある。



長 谷

山門を入つて、長い廊を登ると、兩側は牡丹の花盛である。昔物語にある様な戀を祈つて逢はれた女が喜を植えたのか、逢はれずに空しくこがれた女が燃ゆる思を植ゑたのか。逢うてまた捨てられた女が恨を植ゑたのか。増す花に見かへられた女が苦みを植ゑたのか。

戀を現し、情慾を表す花を寺の庭には——いや罪障を消滅させる爲か。

しかし年々戀も咲く、情も燃える。喜も、思も、恨も、苦も、消えて花となつても、

花も笑ふ、花も燃える、花も泣く、花も苦しむ。花を看る人も花と笑ふ、花と燃える、

花と泣く、花と苦しむ。

觀世音の利益より、美の爲に來る今の世の人は花よりも笑ふであらう、花よりも燃えるであらう、花よりも泣くであらう、花よりも苦しむであらう。

長い廊を登つて三曲、本堂へ入ると、こゝには古の信仰の残つてゐる人々が詠歌を唄うてゐる。今の思のほゆめいてゐる人々は背中合に景色を見てゐる。

自分は内陣を見入れた、蠟燭の火は信仰程明である、しかし牡丹程赤くない。

自分は舞臺へ出て見渡した。前後左右を取圍んだ山々は縁に縁を重ねて、理性程落

付いてゐる。牡丹の中を過ぎて、此縁に對すると、情熱極つて理性に入るか。

あゝ雨は霧を吹立て、縁は迷ふ。理性はまた迷いに入るか。

詠歌の聲は續く、戀を祈る人はないか。戀を祈つて逢ふ人はないか、別れて年を経

て復逢ふ人はないか。あゝ西行が妻に逢うたのはこゝでないか。戀を祈らずに逢ふ戀、

戀ならぬ妻も捨て、捨てられぬ情、人の世の無常に驚いて家を驅けて出た時は振分髪

のゆら／＼とした二人に似た兒の顔も思切られたであらう。花見にむれて來る人を櫻

の谷と嵯峨を立退いた時は吾家の花に盃くみかはした馴初の春も思はなかつたであ

らう。やがて出でじと吉野へ入つた時、花ちりなばと人や待つとは誰を思出したので

あらう。矢張出て東へ行く時、暫の友にさへ月に馴行くむつび忘るなと云残したでは



ないか、鴨一たつ澤の秋の暮に哀知つたのは心無い身であらうか。東の果に月を見て、故里の人も袖ぬらすかとは、彼も更に濡らしたのでないか。都の方へ行く郭公に旅のあはれことつてうとは。遂に都へ歸つて来て、昔知つた人の無い跡に其妻を憐んだから、自分の妻の行衛も知れぬのを思はずにゐられたであらうか。大内のほとりを過ぎて情あつた昔のみ忍んだからは、情の中の情を忍ばずにゐられたであらうか。また西へ志して情をひさぐ女に假の宿を断られた時、眞の宿を思當らなかつたか。讃岐の山の松蔭も住みうくなつた時、吾後の世を問へよとは、跡忍ぶべき人のある身ではなかつたか、遂に花の下にて死なうとは、どこまでも歌人の心、哀の世に生まれ合はせたる爲、寂滅の道に入つて、復活返らず、しかも消されぬ情に泣いて、花に鳥に歌ふ、憐の人は花よりも鳥よりも歌よりも眞の女に逢ふ春の夜の山寺、本心の底から溢れる涙に歌も法も空となりはしなかつたか。彼一生の哀の極み、しかも復別れて二人の中の愛娘まで墨染の衣着せたとはい、雲に偏した古の宗教の哀の極み、さては此舞臺は悲劇の舞臺か。



雨はいよく霧を吹立て、緑は愈迷ふ。牡丹は愈苦しむか。石段を下ると白藤が松にまとうてゐる下に白鳩が二遊んでゐる。



三輪

自分は幽明の界に立つた。

正面の神殿には、薄暗い灯籠の火が二點。参詣路を挟んだ、一帯の杉の木蔭には一點の光も無い。

しかしいかにも神の通路の様である。

雨は神の忍足の様に降る。

あゝ小田巻の糸ではないか、石段の下の杉に縋いてゐるのは。

神の衣は何所へ飛んだ。糸は切れて、杉ばかり繋ぎ止めても、其杉は朽ちて、折れ、

空洞になつてゐる。

自分は其空洞の中を覗いて見た

人二人は優に立てる廣さ、神の情を語るに尤も好さ相な。

しかしまた今にも崩れ落ちて、人の身を巻いて飛び相な氣もする。

神の戀は人の戀になり、更に進んで人の神の戀になる情の歴史の上代の巻の挿書に

なつた三諸の山、人代の情には神聖に過ぎて、一點の紅も許さぬが、更に現の神の

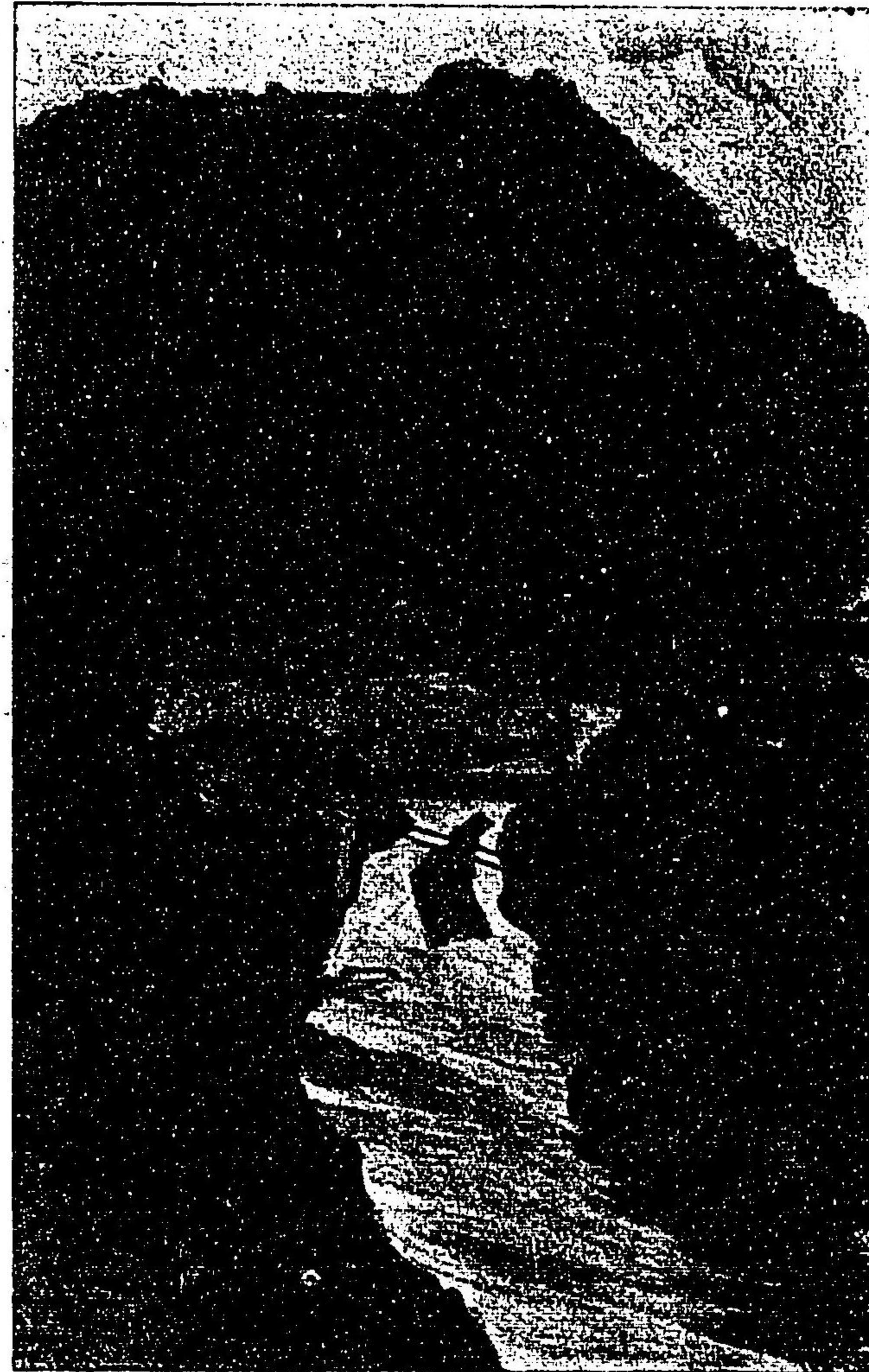
情はどうであらうか。小田巻の糸は復結ばれぬか。巻ず、繋ぎず、何とする事も出来

ぬ自在の羽車はもつと、朽ちぬ木の間へ駆けるかと思ふと、空洞の中に小さい若木が

少女の丈ばかり延びてゐた。









談峯

三輪から降出した時雨は長谷で愈烈しくなり、佐野の渡を過ぎる頃は霰になつて車を留める蔭はあつたが、心は急いで談峰へ着くと、やうく止んだ。麓で車を下りて獨登ると、細い山路はやうく白く、登り果てると全く白い、あゝ山は雪が降つたのである。しかも未紅葉は赤いのである。廻廊も、塔も、社も、多く朱である。朱の上の白、白を載せる赤、宮に紅葉に雪の配合、自然も時にかういふ密書を描くか、時雨に霰に雪の變化、自然も時にかういふ音楽を奏するか。

春日の晝より技巧的ではあるまいか。定家の歌より神韻があるまいか。

あゝ遂に鎌足の事を忘れて歸つた。

芳野

芳野へ行つたのはいつであつたか。

浪華の塵の中で育つて、煤煙の霞む櫻の宮を春の樂園とせねばならなかつた身が、地理書を讀んで満山皆花とあるのに童心は夢の花を描いた芳野。

其芳野へ行つたのはいつであつたか。

歴史を讀むにつけて、兄に迫害されて逃込んだ英雄、そこにも落付かれず、更に落ちて行く隙を舞の手に延ばした美人、身替りになつて塔を蹴抜けた忠臣、山伏になつて落ちた貴公子、堂の扉に情を刻んで死と戦うた若武者、妖怪を睨みかへした勇婦、此等の蹟に魂の花を忍んだ芳野。

其芳野へ行つたのはいつであつたか。

文學に入るにつけて、やがて出でじと思ひながら花ちりなば人や待つと、其身も人



を思ふ歌法師、情の露はとくくと滴つて、試に浮世をすゝがうとした詫人、空に作つて實と誇らうと友を弄んだ悪戯者、母の供して茲こそ殊に大和心になると歌うた國民詩人、落花深き處眉雪の僧に南朝を聞く二十八字詩人、其外いくばくの吟詠に才の花を想うた芳野。

其芳野へ行つたのはいつであつたか。

あゝまだ浪華の座にまみれてゐる頃であつた。五條あたりまで汽車で走つて、それから六田の渡まで車、山の背を徒歩して登ると、花より先迎へるのは緑の門であつた。これは義經を迎へるのか、正行を迎へるのか。早や暗くなつたから、取りあへず宿を取つて、次の朝こそ花より明ける春の曙に大和心を感じ様と早く起きると、花より山は村であつた、村より家は町であつた。此は南朝の餘光か花の露か。浮世をすゝぐ露は如何と奥へ入ると、花を離れて始めて山らしくなつた。山蔭に下りて山家らしい菴があつた。しかしまた詫人の隠家より田舎の隠居の茶室の様であつた。とくくの清水は側に誌がしてあつたが、これはまた試に浮世をすゝぐにも物足の様であつた。

あゝ芳野へ行つたのはいつであつたか。

いや自分はまだ芳野へは行かなかつたか。しかも花は見た——夢の花程美しくは無かつたが、餘所の現よりは多い花は見た。魂の花程哀ではなかつたが、英雄の兜に散り、美人の袖に散つた花は見た。才の花程空ではなかつたが、國を思はせ、人を思はせ、世をすゝがせた花は見た。

さては花に咎は無かつたのである。

幻は破れても花は咲く。花が咲けばまた夢を描かせるか、また魂を忍ばせるか、また才を想はせるか。

しかも亦幻を破らせるか。

また幻は破れても、また花は咲く。また花が咲けばまた夢か、また魂か、また才か。

さては花はいつも芳野である。

芳野へ行くのはいつであらうか。







# 大 和

## 吉 野

與謝野晶子

吉野の子供は、登った木の上から、山畑の豆の葉の間から顔を出して、若い女が通ると、「好い女房さん」と云ふ。

吉野川、下市に行く橋こえず、彼方はるかに上市の川添家並繪とかすむ車峠のおほ阪や、くるまにちりぬ。山ざくら花。

吉野は吉水院の溪にほととぎすが啼いて、山上まわりの行者達が、白木綿の行衣を列ねて若葉の中を上つて行つたり石楠花の赤い花を筋肉のたくましい顔した男が、捧のしなへる程兩肩にかついで下山して行つたりする頃が一番好いと私は思ふ。宿の帳





面の四五行前に知つた人の名のあるのに驚いて、何時お立ちになつたかと聞くと、一月と二十日も前のことなど云ふ答も聞く頃である。花の時節には竹林院にも雇はれた番頭さんが二十人程も居る。狐が夜の間に來て、椀のものにすべき飛龍頭を半以上食べられたと云つて庫裏では大騒ぎをして居る。狐の毛がおつゆに二筋三筋浮いて居たらと、かう思ふと心細くなつて、吉野と云ふ所ほど深い山へ來て寝たことのないその頃の私は、妹と二人で溜息を吐いて居た。

君に文書かむと借りしみよし野の竹林院の大硯かな。  
私が春の吉野で胸に浮んだのは、菜の花や、吉野下りくる向う山。と云ふ太紙の句だけであつた。



初瀬

昔から大きい寺は度々炎上して度々建てられて居る。それであるから私は初瀬のお寺の廻廊の新らしい木の香のするのに却つて古の趣のあるやうな気がした。けれど私はこの寺で坊さんの少し坊さんらしい、何何大徳と云ひたくなるやうな人を一人でも見たかつた。寂しい秋の入り日、本堂の廊下に處處に立つた小さい佛像の前に供へた、薄い黄いろの、海綿のやうな鶏頭の花にさして居た時、私はこの寺を昔の物語の書に多く書かれた所、王者の信仰の厚かつた場所が此處であるとはどうしても思ふことが出来なかつた。さうかと云つて乞食の盞をやるのにも寒さうなお寺であると思はれた。初瀬川は大昔は船などが澤山往來したさうであるが、もう源氏物語の中には、堂の前に行く小さい流が初瀬川ださうだと書いてある。私はわるくなつた鯉でお中食をさせて貰ひながら、この山を越えて伊賀を越えてお伊勢参をした昔の話を聞いて居た。



奈良

うす色の若草山と、千年の杉の繁りに繁つた春日山が、二つ重なつて奈良の大路の正面に立つて居るのであるから、この二つの山が鬼面人を驚かすとも云ひたいやうな處もある。三笠山へ上つても、二月堂から見ても、奈良にはこの外に高い山も美しくい丘もない、けばけばしい樓臺を建てた宿屋交りに町の家を見る高い處などへは登らない方が好い。東大寺は屋根を見ぬやうにして堂の中へ入らねば心地が宜しくない。それから大佛殿は床の冷たい敷瓦の上を踏んで歸つて來る時がうれしい。重くるしい力を持つた宗教そのものから放たれたやうな氣がして、門前の大佛餅を私は食べて居た。子供や乞食や旅人が澤山遊んで居る南圓堂は、京の祇園よりもあたりの空氣が古くて暖いやうな氣がする。猿澤の池は上の丘から櫻の散つて來て、みんばんやなどと書いた宿屋の二階の影に交つて居る時だけが好い。柳の枝が太くなると池の岸に建て

續けられた燈臺も一層厭な氣持を起させる。私には春日の山と宮と春日野ほど好きな所は少ないのである。

大内の内教坊に養はれ光源氏も見つる舞姫。  
行く春の春日の宮の玉垣の松の根にちる山吹の花。  
いにしへの奈良の都の八重ざくら三月堂の内陣に立つ。





## 法隆寺

麥畑と菜の花の畑との間を七八町ほど通つて村へ這入ると、草餅を賣つてゐる家が左手に一軒あつたきり、外に格別飲食店らしいものが目に附かない。唯べにから送り出格子の百姓家ばかりつづいた村が、古めかしい静かな氣持を興へた。斑鳩の宮の跡を踏んでゐるのだと思ふと、何處かで鶏の時をつくる聲も今の世では無い氣がした。青い蔭を庭一ぱいに店先へ干した側で、手拭を被つたお婆あさんが悠長に絲車を廻してゐる前に立止まつて、供の女中に法隆寺さんへたづねさせると、絲車の把手から手を放して「右へ廻つて其れから左へ真直にお行きなはれ、又右へお廻りになると衝當りがお寺だす」と鄭重に教へてくれた。法隆寺の境内の廣いのは豫想どほりであつた。きちんと縦横の路が並んで、細長い切石で縁をとつたり段をつけたりしてある中に、黄いろい土が春の日に照されてゐるのが、律宗の大きな袈裟を見るやうで、御堂

を拜まぬ前に白檀を焚く香が感ぜられた。中門を這入つた右の所で夫婦の巡禮が袴を穿いた納所から判を押して貰つてゐる。その巡禮の頸から胸へ二重に廻して掛けてゐる大きな機質のやうな珠數と、正面に見える屋根の傾斜の緩やかな金堂の物寂びた建築とが妙に調和して見えた。白衣の上に鼠色の裳を穿いた小僧さんが幾つも大きな鏡を手に持つてゐて、わたし達を金堂の方へ案内して呉れる。薄暗い壁の佛畫には大きな龜裂が入つてゐる。紅い彩色は珊瑚を粉にしたものだなどと小僧さんが話す。玉蟲の厨子とか何何の天盖とかは黒くなつてゐるのでよく観ることが出来ない。彌勒の座像と如意輪觀音の立像とを大へんに親しみのある御姿だと思つた。奈良から此處へ來たわたしは、東大寺の大佛と仁王とに背後から睨まれてゐる氣がしてならなかつた。が、この二つの御姿を拜むと母の手に抱きとられるやうな安心を覺えるのであつた。それに此處の四天がまた三月堂の四天の威嚴があつて立派なのに比べると、何んだかお伽噺の中の將軍のやうに幼く滑稽に思はれた。金堂を出て塔を観た。丹塗の柱に龍を卷き附かせたのは鎌倉時代に加へたのだと聞いたが、内部の白い澤山の塑像と共に



悪い思ひつきだと思つた。しかしきやしやな中に軽快な趣のある塔の形はよいと思つた。山背王の十二人の皇子が蘇我の兵に圍まれて此塔の上から西方浄土へ飛ばれたと云ふのも、ふさはしい傳説だと思つて暫く立止まつて打見上げた。鋼封藏は汽車に乗る時間の都合で拜觀を見合せ、夢殿の異つた建築を觀て、急いで停車場の方へ歩いた。



塔の峯

櫻井驛で汽車を下りて、三登雇うた車にはどれも犬の先引が附く。わたしは其れを見るのが厭さに扇で顔を隠しながら乗つてゐた。塔の峰の坂の上り口までは二時間ばかり掛かつて着いた。坂は急である。二人の足弱を供の男が勵まし登る。檜や杉の小暗い木立の中に折折楓がまじつて、午後の日を受けた木末の枝だけが明るい紅葉を見せる。それに足の疲れをまぎらして漸くの事に御社へ着いた。境内には櫻の紅葉が散つてゐた。高い石の段を登つて拜殿の縁に腰を下ろすと、白い髭の生へた主典が奥の方で机を前にしたまま目鏡の上から此方を見て軽く會釋をした。主典から一問ほど離れて巫女が一人、紅い袖の上に白い汗衫を襲ねて、背を此方へ向けながらさざんかと坐つて、何かの本を片手で持ちながら讀んでゐる。御神樂を上げたいと云はせたが、その巫女が出て来て今日はもう時間が切れたと云ふ。十二三の愛くるしい圓顔の



巫女である。まだ午後四時頃であるけれども山の上は次第に薄暗くなり、わたし達の外に参詣の人も無いので、遠い木末で百舌らしい鳥の聲がする外、ひっそりとして暮れて行く。淡海公の兄弟が唐から將來した材木で造つたと云ふ塔の中では、修繕をしてゐる大工が三四人道具をかたづけしてゐた。この彩色を施した古い塔の下には鎌足の遺骨が埋めてあるのだと主典が出て来て話してくれた。わたしの好きな藤原氏は祖先からして文明貴族であつた。今夜は御社の前の一軒しか無い宿屋へ泊ることにしたが、わたし達と一足遅れて宿の敷居を跨いで這入つて来た商家の隠居らしい老人夫婦は、反對に岡寺の方から登つて来たとやらで、京都訛りで物を言つて、男は大きな瓢箪を肩から脇下へ吊り下げてゐた。廣い宿屋は春の花時の客が目的なので、秋はがらんとしてゐる。其れに夜風が寒いので氣疎く心細い氣持がする。中二階のやうな座敷へ通されて、九時頃になつて風呂が湧いた。夜なかに猿が啼いたと朝になつて供の男が話してゐた。

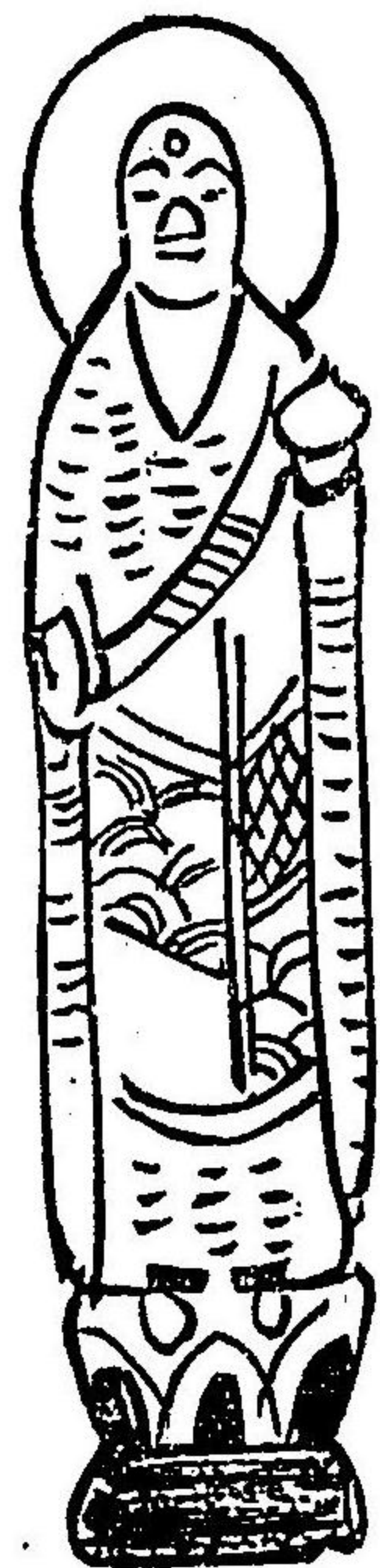
## 當麻寺

十歳ばかりの時に惨酷な雪責めの芝居を見てよい感じがしなかつた。それから物の本を読む年頃になつて、中將姫は歴史上に根據の無いものだと知つて益厭に思つた。父の右大臣藤原豊成と云ふのは奈良朝の有名な大臣で、その子も皆大臣參議になつた顯榮の家であるけれど、そんな女があつたと云ふ事は何にも書いて無い。子と繼母とが一所に住むと云ふやうな事もその時代には無いことだ。中將姫と云ふ名からして第一に怪しい、奈良朝にも平安朝にも有りさうにない名である。或は豊成の一門の女にでも某と云ふ尼があつて太麻寺を建て曼陀羅を織つたのは事實であるかも知れぬけれど、繼子いじめと云ふことは落窪物語などに現はれて来る平安朝の假作物語の思想であるから、後世になつてさう云ふ物語を附け加へ、更に徳川時代になつて一層潤色されたのである。おほかた平安朝の中頃以後に中將と云ふ名を負うた女房が尼になつ

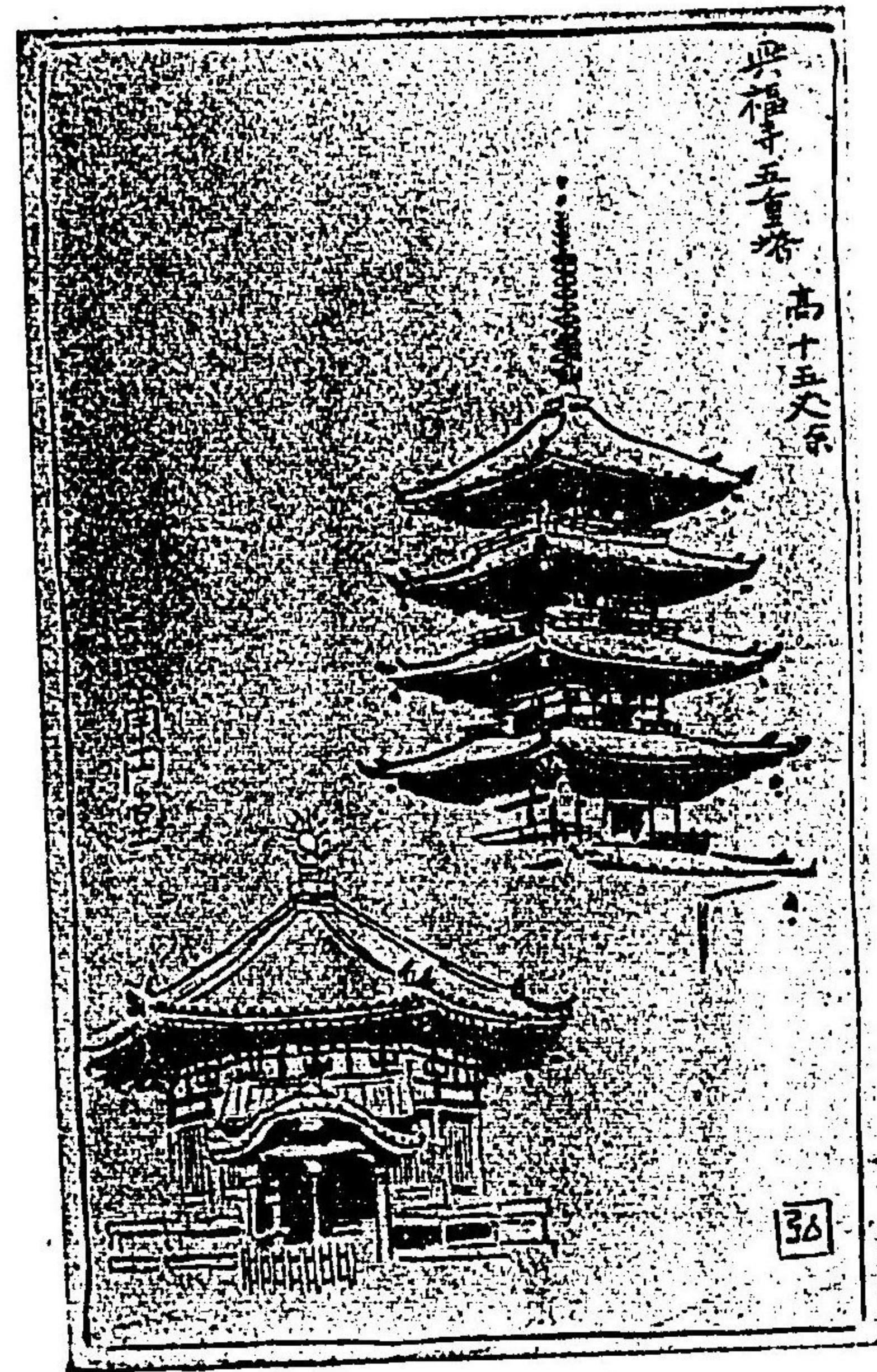
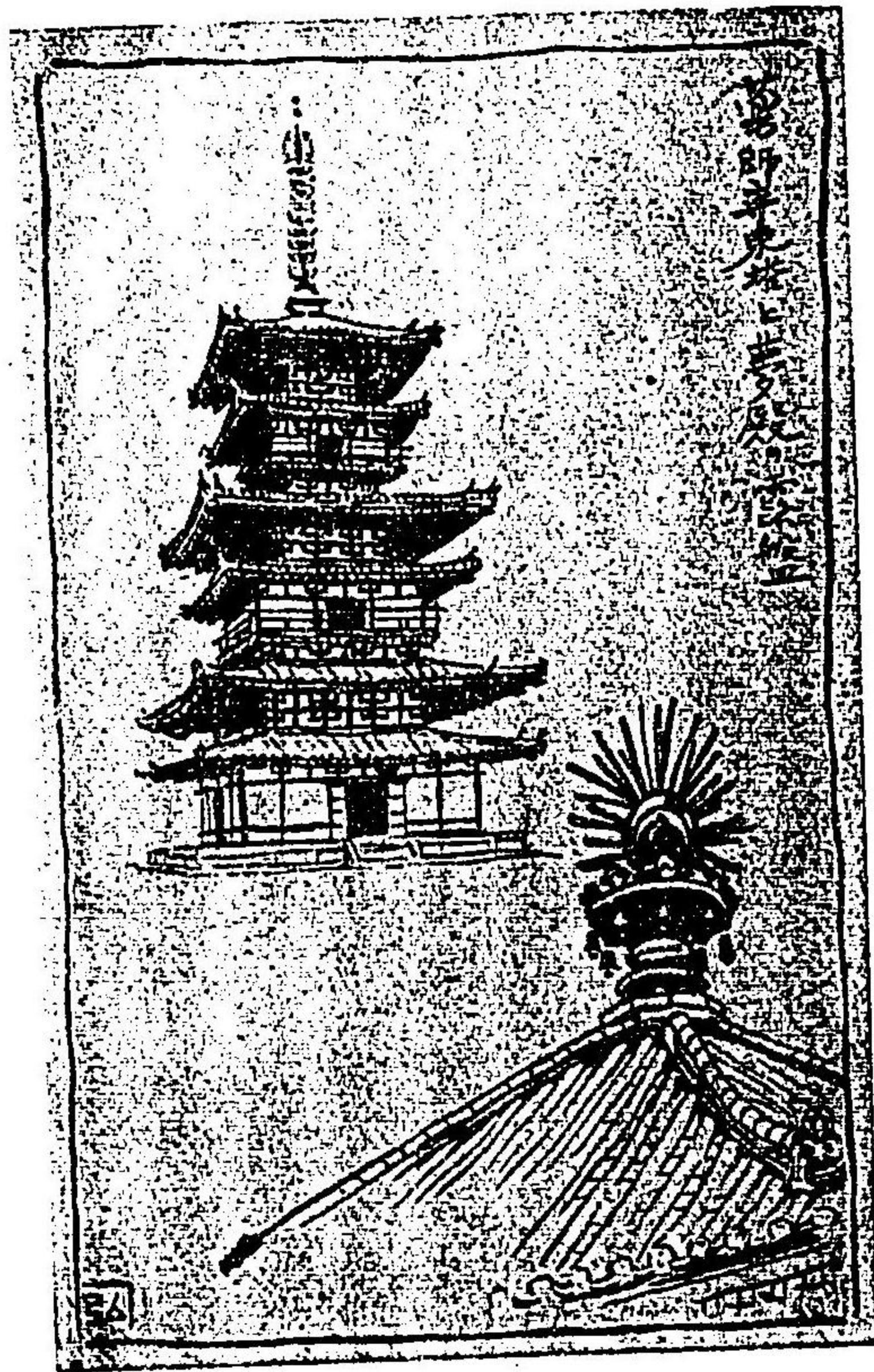


て此寺に住んでゐた事でもあつて、それに鎌倉時代か室町時代かになつて姫と云ふ言葉添へて呼び、寺を建てた前の女とその尼とを一所にして前の物語の主人公として仕舞つたのであらう。わたしは太麻寺へ参る氣はしなかつたが、久米寺を觀、畝傍の御陵を拜んだ歸りに、汽車の窓から二上山を眺めて、萬葉集のなにかし女王の歌を想ひ出すと、俄にその山の麓の土が踏んで見たくなつたので、王子驛で下りて同行と一所に車を急がせた。二里あまりの路を走つて太麻寺の裏門に着くと夕立が降つて來た。霽れるまで本堂の縁に休んでゐると、白い帷布の上に黒い麻の袴を穿いた堂守の男が出てきて「御縁起を聴聞なされ」と云ふので結界の中へ這入つた。堂守は低い須彌壇のやうな物の上へ登つて椅子に腰を掛けながら、半紙の帳面に書いた無稽な縁起に可笑しな節を附けて長長と述べるのである。それが濟むと戸帳を上げて中將姫の尼すがたの像を觀せた。御自作だと勿體をつけたけれど後世の女の顔つきだと思つた。名高い蓮の絲の曼陀羅は何處やらへ出開張になつてゐると話した。雨が止んだので冥加料を納めて後の山の上に立つた塔を觀に登つた。この塔は遠くからも見えるよい形

の塔である。今一つ塔があると車夫が云ふので、本堂の前の石段を下りて住持の住んでゐる本坊へ行く、庫裡の方に陀羅尼助を煎る竈が並んで苦いにはひのする湯氣が立つてゐる。陀羅尼助は此寺から諸國の藥種屋へ卸すのだと聞いた。本坊の後の山にある赤い塔は近頃の建造で何の趣もないのに失望した。わたしは太麻寺へは行かなくてもよい、二上山と一つの塔とを遙かに望んで置けば十分だと今でも思つてゐる。









# 西の京

## 秋篠寺

薄田泣堇

綾井秋篠寺へ来た。五月の中頃で、からつと晴れた空に雲雀が一つ喋舌つてゐた。綾井は門に入らうとして、不圖頭の上を振り仰いでみた。塗の剝げた門の柱は、既うぼろぼろに腐びかゝつて、其邊一體に生新しい燕の糞がだらしなくへばりついてゐる。今は既う幾年になるだらう、以前来た折には這處ではなかつた筈だと思ふにつけて、綾井は衰へたものに對する軽い哀つぽい感じを覺えた。それが路の兩側にこんもりした青葉若葉の、峻かすやうな柔かい匂と連絡つて、言はうやうのないせつない氣持になつて胸に泌み込むで来る。





綾井はとほくと歩いて往つた。渠は若手の美術家として可成に世間に名を賣つてゐる男だ。何處かに天才めいた手筋が見えるといふので、先輩達の朋輩達が是非一度佛蘭西あたりへ往つて二三年修業して來たらよからうと勧めるので、渠も其の氣になつて、忘れもしない去年の春だつたか、親の代から持傳へた幾かの家作だの田畑だのを抵當に、姉の嫁いてゐる和歌山邊のさる親戚から三四年の洋行費を引出す事に定めて、月が更つたら愈神戸を發つ事にしてゐた。するとある日親しい友達の誕生祝ひに發ばれて、例になく甚く喰べ酔つて、その夕方つい寝冷をしたのが原因で、右の胸に一寸した痛疼を覺えるやうになつた。初めは何の事とも思はないで、つい其儘にして置いたが、場合が場合だから何だか氣に掛らぬ事も無いので、掛りつけの醫者に診て貰うと、醫者は黙つて顔を顰めた。綾井が右肺に故障のあるのを知つたのは此時が初めて、醫者は今の間に治療さへすれば何の事はないと氣安めのやうな事を言つたが、實際病氣の容子は醫者の言語よりかすつと進むでゐた。

もともと氣の小さい心配性の方だつたのが、這麼事になつてから綾井の神経は甚く

高ぶつて來た。言ふまでもなく佛蘭西行は一先づ沙汰止みになつた。そればかりか醫者の勸告だからといつて、以前は三度の食よりも嗜好だつた油畫も此頃では滅多に描かなくなつた。偶に畫布に向つて繪具を練る事もないではないが、大抵は仕揚げずに其の儘おいてしまふ。當人に言はせれば、身体が懶くて興が續かないのださうだが、眞實のところ死の恐怖が心のどん底にまで喰ひ入つて、綾井はほんの暫時の間も、その無氣味な闇い影を考へずには居られないのだ。で、渠は保養かたがた旅行を思ひ立つた。行旅といつたところで、生存競争の激しい、砂埃の立つ都は、一体が其麼性の病人には宜くないが、とりわけ綾井のやうな精神状態にゐるものには、刺激が強過ぎるので、渠は醫者と相談の上大和を撰むだ。

綾井は南山城の祝園の産れで、大和には小供の時から何ぞといつてはよく遊びに來たものだ。繪畫を習ひ出してからも、古美術の研究だの、自然の寫生だのといつては一年に二三度は定つたやうに遣つて來た。綾井の考へによると、大和にはお互の祖先の偉大な生活の内容が、秀れた技術によつて其儘残つてゐる。だから祖先の事業を知



り、その子孫たるお互の可能性を知らうとするには是非とも大和を了解せねばならぬといふので、自分でもせつせと研究した効があつて、今ではこの地方に残つてゐる繪畫、彫刻、建築なぞについては一通りの智識と鑑識とも有つてゐる。——慙うした昵懇の土地柄だけに、病氣の保養かた／＼旅行をするには、何かにつけて氣遣も少からうといふので、綾井は一寸叔母の家を訪ねる位に思つて家を出た。

綾井は俯ぬけのした顔をして講堂の前に立つた。夏初めの日光は南向きの堂の蔭から、からつとした境内の空地一杯に溢れて、地盤れがちらくちらと眼に沁むので、綾井は急に眩々となつて、ぐたつと塗のめくれかゝつた柱に凭れた。汗が留め度もなく滲み出る。綾井は手巾を取り出して、そつと額を拭いた。

たつぷりと繪具を投げつけたやうな後方の木立からは、初蟬の聲が絲のやうに頭へて聞える。それが何ともいへず心細い。綾井は寂しさ其のものと鼻を衝き合せたやうな氣持をおぼえた。

講堂の扉はびつたりと閉つてゐる。綾井は退儀さうに腰を伸して、葎格子に捉つて内部を窺いて見た。外はからつと晴れきつた天氣にも、這歴古寺となるとまた格別なもので、微臭い湿つぽい空氣が冷やりと鼻に沁むので、綾井は思はず軽い嚏をした。すつと奥まつた薄間い土壇に、寝不足らしい腫れぼつたさうな眼で、つくねんとした本尊の藥師如來を中央に、兩側には日光月光の兩菩薩であらう、營養の足りなささうな青白い顔をした二人が、手持不沙汰に控へてゐる。心もち右に掛離れて、春日佛師の作だとかいふ十二神將の木像が、恰で人形箱を引くり覆したやうに混雑と折重つて並むでゐる。

いつの歳だつたか、綾井は確か十月も末になつて、秋雨のびしよ／＼と降り頻る日の夕方に、たつた一人で此寺に詣つた事があつた。矢張慙うして埃塗れの葎格子に捉まつて、本堂の内部を覗き込むだが、その折には那の十二神將の附近に、すばぬけて大きな技藝天女が立つてゐたのを記憶してゐる。ふつくりした顔を心持傾けて、切長な眼をじつと伏眼に、左の手を肉置のよい腰の附近にぶら垂げた容子といつたら、い



きなり抱き着きたい程美しかった。綾井の其頃といつたら、明暮理想の美に憧憬れてゐたもので、那の技藝天女のふつくりした姿を見ると、唯もう茫乎と夢でも見たやうな酔心地になつてしまつた。藝術家と名のつく輩が、恰で獵好きの男が鶴撃にでも出かけたやうに、夜の目も寝ずに自然に交り自然に親むで、夫で漸と其の片影をしか見ること出来るか出来ないかといつたやうな美の完い恒久の姿は、恚うして今も秋篠の里に残つてゐる事かと、手を合せて拜むばかりにして見惚れてゐた。薄暗い秋の日の夕方、名残惜しさうに幾度か振り回り振り回りして、泥濘の途をびしよびしよと歸つて往つた心持は今だに忘れないでゐる。

が、其の後綾井の氣持はすつかり變つてしまつた。本喰蟲の齒が無花果の實を青枯にしてしまふやうに、綾井の胸に喰ひ込むた病氣は、その美しい技術の夢をまで萎れさせて了つた。これまで綾井の生命はその技術にあつた。霽布の上に現はれた繪具の幻は見るから美しかった。が、一度其の後を覗いてみると、そこには黒面の死がのつそりと蹲踞ひでゐた。恰と美しい花を摘うとして、その葉蔭に烏蛇のどくろを捲い

てゐるのを見つけたやうなものだ。綾井は人間の生命の如何にも慘酷なのに驚かぬわけに往かなかつた。それからといふものは渠は凡のものに對して、暗い影を見るやうになつた。技術は無益に過ぎない、綾井はいつそ黙つて死にたいと思つた。

で、今また恚うして此寺に来て見ると、技藝天女は既う居ない。那の美しかった姿は、矢張同じやうに此處に並むでゐた救脱菩薩だの、十一面觀音だの、秀れた佛樣達と一緒に、いつの間にか奈良の博物館に擔ぎ込まれてしまつて跡は空虚洞のやうに静肅してゐる。其邊の梁は蜂の巢のやうに蟲が蝕ひ、壁はぼろ／＼と崩れかゝつて、廊下も本尊も埃塗れにくつたりとした容子といつたら、恰で今の自分の心をつくりだ。綾井は自分の廢殘の軀を弔ふやうな氣持で、飽かずしげ／＼と本堂の荒れはてた空氣を眺め入つた。そして深い溜息を吐いた。

「わざ／＼此寺までやつて来て、恚うして自分の心の奥を窺いて見るのかなあ」  
綾井は恚う思つて、菟格子に捉つたまゝ、懐かしいもの、やうに暫時は其處から離れ得ないでゐた。



やつとの事で綾井は講堂から離れて来た。すぐ手前に小作りな納所と庫裏とが並んでゐる。お参りの人といつても偶にしか来ぬかして、今し方から障子を細目に、黄ろく萎びた險相な女の顔が胡散さうな眼付で、自分の姿を見咎めてゐるのに綾井は氣がついた。石壇を下りて其方へ歩いて往くと、何だかぶつく／＼獨語を言ひながら、どうやら泡喰つたやうにいきなりびつたりと障子を閉て切つてしまつた。

綾井は寂しさうに笑つた。いつそ止さうかと暫時入口の闕へ衝立つて考へてみた。渠が此處に来たのは、直ぐそこにある香水堂が見たいからであつた。綾井は遠慮さうに闕を跨いで案内を頼むだ。すると鼻先の煤けた障子がすうと開いて、險の弛むだ、血の氣の薄い、疲れたやうな顔をした五十許の坊さんがひよつくりと出て来た。綾井は誰かに肖たやうな顔だと思つた。

「香水堂を見せて戴きたいのですが。」

綾井は鄭重に言つて黙つて坊さんの顔を見た。坊さんは恟々した眼付で、旅囊のした綾井の身装を、頭から脚の先まで一わたり嗅ぎまはしながら、

「お拜ませ申すに差支おへんが、拜觀料を戴きまへんとな……………」

坊さんは露出に恚う言つて退けた。その口上振に厭に勿體をつけるやうな、それで何處かにお参りを取逃すまいとする心遣ひが見える。綾井が黙つて白銅一つ撮み出すと、坊さんは脂氣のない、萎びきつた掌面に受け取つて、大事さうに一吋押戴いた。で、その儘數珠と一緒に弄ぐりながら、やつとこなたと土間に飛び下りた。

「どうぞ此方へ」

踵の擦り切れた冷飯草履を突掛に、かひがひしく前に立つて出て往つた。

綾井は後に縦いて外へ出た。庫裏を出て右へ、壊れかかつた木戸を潜ると、直ぐ其處が香水堂で、節目の多い松板で粗末な小屋掛がしてある。坊さんは入口に立止つて、何だか厭に勿體ぶつて譯もわからぬ經文を唱へ出した。そして心持腰を屈めながら、蝶番の脱れかかつた扉をおっかな吃驚に開けにかゝつた。綾井は其の素振を見て、同



じ人間に生れた耻辱を感せずには居られなかつた。

貴方はん、御存じとすやろが、此處はもと小栗栖の常陸阿闍梨——とお言ひやす方がな、唐土の華林寺で大元明王の秘方をお受繼になつてお歸りやした。それからな……」

と坊さんは顔をもぐもぐさせながら、厭に噎がれた聲で縁起を説き出した。井綾は其慶事は何でもいゝといつた風に、背の低い坊さんの肩越に凝と水を覗き込む。一間四方に足るか足らぬかの底淺の井戸で、其邊に足を踏み込めぬ程繁り合つた蔓草だの、笹つ葉の根の白いのが石垣を潜り出して来て、江浦草髪のやうに纏絡つてゐる。水は如何にも澄み切つたもので、細い砂利底に守宮が一つ謎のやうに沈んでゐるのが、つい手に取れさうに見える。坊さんは例の拘々した、疑深さうな眼付で盗むやうに綾井の顔を振り向いて、そして京訛りの早口でまた喋り出した。

『ある夜の事としてな、貴方、阿闍梨はんが例のやうに此寺にお籠りで、明方の阿伽をお掬ひやすと、井戸の中に大元明王の御姿があり〜とお映りやしたさうとす。大

元明王のお姿とつせ、なあ貴方はん、偉い御信仰やおへんかいな……』

『はあ、さうですかねえ』

綾井は上の空で恠う答へて、黙つて坊さんの顔を見た。血の氣の少い薄唇が、歪つるやうにびくびくと揺くのが如何にも惨だ。綾井は其の容子が何も誰だつたかに肖てゐると思つて一寸小首を傾げた。あゝ思ひ出した、藤木先生だ。然うだ、自分が繪の手解を教はつた那の藤木先生に相違ない。先生は例あゝいふ口つきで、解りきつた事を三度も四度も繰り返して教へたものだ。先生は甚く餅が好きで、確か土用の餠餅が咽喉に詰つて、その儘ころりと亡くなつてしまはれたと聞いてゐる。綾井は這慶事を思ひ出して、坊さんもどうかすると餅好ではなからうかと思つた。

『つかん事を訊きますが、貴方餅は好きですか。』

『え、何とす。』

『貴方餅は好きですか。』

『はゝあ餅とすかいな。餅もよろしおすが、私は矢張これぞな。』と、ぐびりと煽飲り



つける真似をして、「この方どすと、貴方はん、以前はなかなか飲りましたんやが、今既う飽きまへんどす。この二三年ちふもの腹痛患ひましてな。」と詰らなさうに軽く笑つた。綾井は他の病氣を聞くと、幾らか氣が安まるやうに思つた。

へばりついたやうに底に沈むでゐた守宮がふいと動き出た。ひよくりひよくりと戯けたやうに翻筋斗うつて、水の上面まで小躍して昇つて來かと思ふと、ひらりと身を翻して鍾のやうにつつと沈むで往つた。その刹那の下腹の真紅なのが火のやうに光つた。綾井は阿闍梨が見たといふ大元明王の姿より、守宮の腹の真紅なのが何程氣に入つたか解らぬ。渠は人間と生れたら、誰しも一生に一度は那の火のやうな腹の色を見せなければ嘘だと思つた。綾井は毒草の花を想像した。咽喉を焦すやうな酒を想像した。婦人の血を想像した。そしてまた自分の血を畫布に塗りつけて、書を仕上げたといふ畫工の談話を思ひ出した。

正直なところ、綾井の従來の作品には、まだ火のやうな腹を見せたものはなかつた。綾井は自分でもよく夫を知つてゐる。出來ればこれからだ。——いや今だ………」

思つて、子供のやうに肩を敲らして一寸氣取つてみた。が、次の瞬間、今の自分には既う仕事を仕上げるだけの精力と興味とが悉皆無くなつてゐるのに氣がついて、覺えずぐたりとなつた。そして深い溜息を吐いた。

氣がついてみると、坊さんは綾井の如何でもいゝといつたやうな素振に張合ぬけがしたらしく、獨語のやうに低聲で、

『貴方はん知つといやすやろが、毎年正月の初めに、禁裏で御修法をお仕やす事になつとります、もともと此は阿闍梨はんがお創めやしたのやさうとすが、此頃では御上でも久しう絶えとりますげに聞きますさかい、何とかはい、寺方からお願ひして、古に復したい思つとりますが、ついその力が足りまへんよつてな、貴方はん……』

と早口に喋舌くつて、一頻り數珠を爪繰りながら

『なあまいだ、なあまいだ……』

と掬ひ上げるやうにして掌面を合せた。すると何した機みか、先刻綾井が納めた拜觀料の白銅が、するりと掌面を滑りぬけて、敷石の上でかちんと音がした。坊さん



は慌て、泳ぐやうな手附で拾ひ取らうとすると、貨はころ／＼と水に轉げ込むでしまつた。先刻底に沈むた儘死ばつたやうに凝としてゐた守宮は、餌とでも思つたものか、小當りに一寸啄いてみたらしかつたが、直ぐ既う絶念めたやうに以前の窪みに歸つてしまつた。坊さんは一寸舌打をして、悔しさうに凝と覗き込むでゐる。

綾井は寂しさうに笑つた。慙うした未練がましい素振を見ると、何だかまた氣の毒にもなつて、代りに今一つ白銅を撮み出して、黙つて坊さんの掌面に載けてやつた。すると恰ど餌にでもありついた猿吉か何ぞのやうに、坊さんはひよいと綾井の顔を見て、追従かるやうな眼つきをして、それでも一寸辭退はした。が、二言目には既う受け入れて、

『では折角のお志やさかい……………。』

と何喰はぬ顔で仕済してゐた。

綾井はいつそ悲しくなつた。一寸會釋をして歸らうとすると、坊さんは脂焼のした顔を露出しに、

『貴方はん、既うお歸りですか、まあお茶でも啣つてお往きやすといへんに。へへへ……』

と氣味の悪い追従笑ひをしながら、木戸口まで送り出して來は來たが、ついまた後歸りをして、何か吐きながら凝と水の底に見入つてゐた。

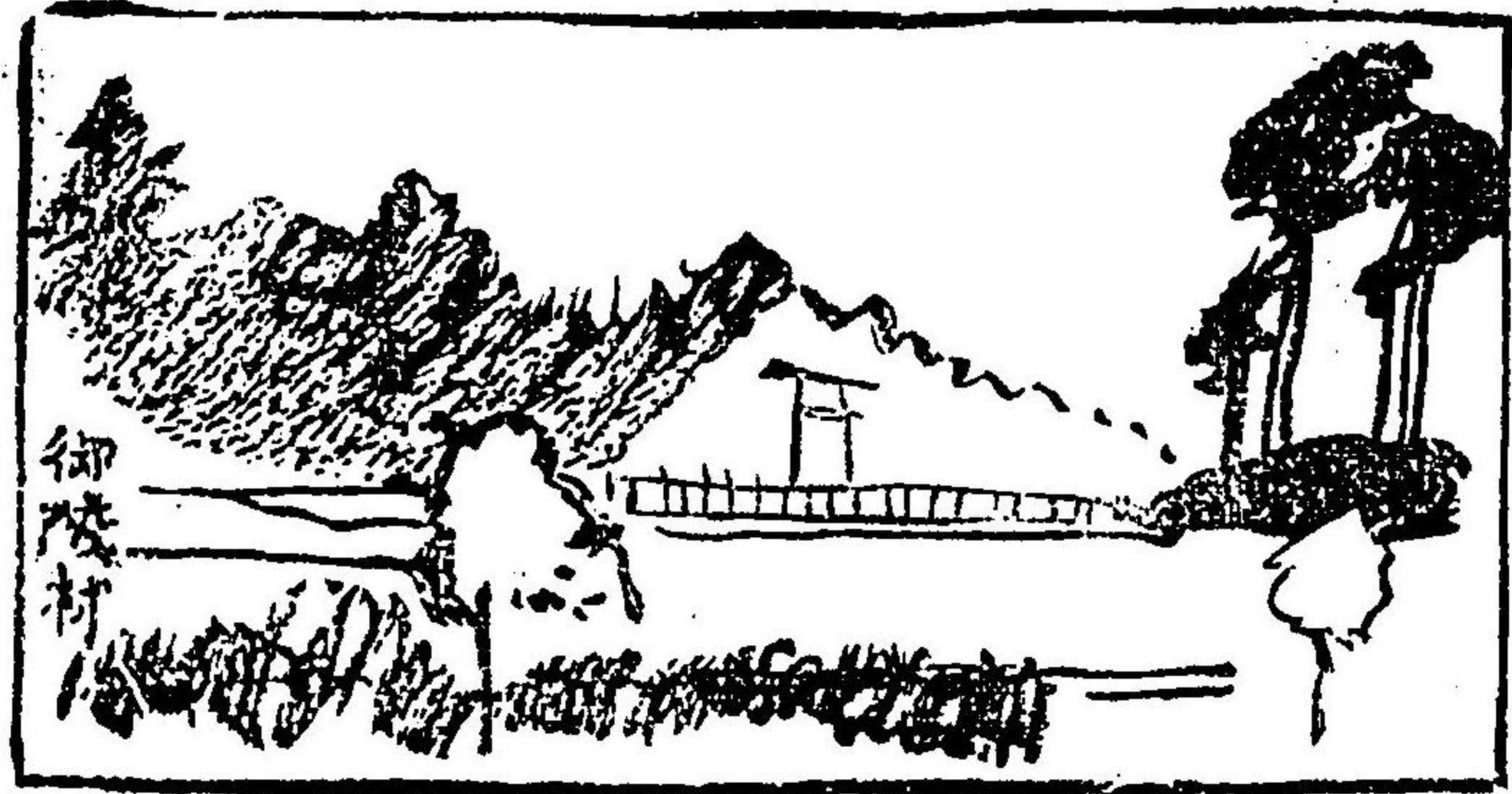
綾井は外へ出た。空はからつと晴れてゐる。三輪の附近からむくむくと眞夏のやうな白雲がもちあげて來て、押蔽さるやうに中空に擴がつた。綾井はこれから何處へ出やうかと思つた。西大寺にしようか、招提寺にしようか。然し見てからの心寂さを思ふと、何となく見たくないやうだ。それに何やら既う草臥れたらしい。渠はいつそ家へ歸つて、何も考へずに寝そべつてゐたいと思つた。——實際綾井が此度見た大和の感じは、以前には背てもつかぬものであつた。

綾井は何處へ往くともつかず、とぼ／＼と歩き出した。坊さんの素振がつい眼に見える、渠はいつそ那麽生活を羨ましく思つた。



旋 風

秋篠寺を出て南へとぼくと西大寺村へ下つて  
 来ると、晝過ぎの太陽が容捨もなく照りつけるの  
 で、急にくらくくと眩暈がしさうになつて来た。  
 それに朝風くから午過の今時分まで、何一つ口へ  
 入れるでは無し、へつた矢鱈に歩き通しに歩いた  
 ので、腹は空いて力が無くなるし、脚は膠り着け  
 られたやうに重くなるしい。  
 山陵山は白髪染をした九十九姫のやうに、赤ち  
 やけた山の素肌黒ずんだ松の樹がばらばらに散  
 ばつて見える。一跡にこゝらあたりの松の色は、



地味の故でもあるか、如何やら餘所のに比べて少し黒味が勝つたやうに思はれる。直  
 ぐ前方の西大寺村の森にしてからが然うで、つい先がた發つて来た秋篠の樹立にして  
 も――振り回つて見ると、如何も黒味が、つて見える。  
 いつの秋であつたか、びしよ／＼雨の降り頻る夕暮に、唯一人此の道を奈良へ歸つ  
 て往つた事があつた、其の折は、秋篠寺で拜んだ技藝天女のふつくりとした面ざしを  
 幻に描いて、酒にでも酔つたやうな心持であつたが、今は那の慾の深い住職の悪者  
 さうな顔付を思出して、感然なやうな、酷つたらしいやうな、それで何處と無くまた  
 可笑味を感じて、つい吹出したくなつて来る。――が、如何も腹が空いたものだ。  
 忘うして空腹を抱へて歩いてゐるうち、何日ぞや讀んだゴルキイの『荒野』といつ  
 た短篇がつい記憶に浮んで来た。雑色の補布で縫ひ綴つた灰色の股引を、瘦せかじ  
 けた空脛に引纏ひ、途中で拾ひ取つた破靴を上衣の裏を引解した糸で踵に結び着けて、  
 ばた／＼と砂煙を立て、往く書生だの、赤シャツを着て、剣ちよろけの軍帽を横倒し  
 に被り、袋のやうな洋服をだ／＼に、素脚の儘ですた／＼と歩く兵隊上りだのと一



緒に、地魚れの甚い夏の荒野を、腹はべこくになつて、せかくと急いで往く姿を思ひ浮べると、今一人の道連が如何やら自分のやうに想はれて、可笑しくも、氣の毒にも、また腹立しうもなつて来る。

はつきりとは覺えて居らぬが、何でもその物語の中段に素脚の兵隊上りであつたか、雲を見て覆盆子汁に乳を振掛けたやうな色合だといつたのを聞いて、急に食氣がさして餓餓がいつそまた堪へ難くなつたといふ一節があつた。——覆盆子といへば、今が丁度出盛りの、つい其處らの草の間にもこつそりと實つてゐるものでもあるまいと、私は鶴目鷹目で草を掻き分けて見たが、一粒をも見當らなかつた。

私はすっかり絶念めて了つて、唯もう命令けられたやうにすた／＼と歩き通しに歩いて往つた。豆は爆せ切れる程實が肥つたし、麥も除々熟れかゝつて来たので、野良仕事も一先片付いたかして、見渡した處人の子一人そこらに働いて居らぬ。程近い秋篠川の川縁に家鴨飼の子供であらう、長い竹竿を擔いだのが、小高い岡の上にひよいとのぞいたかと思ふと、直ぐまた段々降りに見えなくなつて了つた。どうやら夏初の

氣力に充ちた附近の自然が、言ひ合したやうに虐迫と重みをもつて私一人に押被さるやうで、疲労と不安とに除々辛抱が出来なくなつて来た。

すぐ手前に刈り込むやうに行儀よく立列んだ麥の穂並が、さつと一揺れ白く揺れて、快活な風が童子のやうに、地面に轉がり落ちて来た。此頃の照ついでで乾ききつた路の砂埃が、ぱつと慕し起つて、一煽り煽り立つたと思ふと、先細に振り揚げてころ／＼と轉つて来る。するとそこらにだらし無く寝轉んでゐた木葉だの稗心の片々になつたのが、目に見えぬもの、手に引き着けられたやうに、つと靡り寄つて一緒になつて轉々と舞ひ揚つたと見ると、今度はひよいいと立直して、する／＼と爪立に伸し上つたが早いか、颯と横倒しに倒れかゝつて、つつつと小走に右へ麥島の畔になぐれ込むで了つた——旋風が巻いたのだ。

私はいつの間にか其處に銜立つてゐた。氣難かしい蟹つ面の大自然の重くるしい、沈思の底にも、如何かすると蟲の蝕つたやうに這處空洞が出来て、周圍の凡ての力が慌てたやうに其處に流れ込む。してまた偶には思ひも掛けぬ程大きな渦巻を仕出來す